

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第23集

つち だ い せき
土 田 遺 跡 II

1991

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県西春日井郡清洲町は、尾張平野を南北に流れる五条川下流域にひろがり、弥生時代以降絶えることなく人々が生活を営み続けてきた町であります。ここには、朝日遺跡をはじめ、廻間遺跡、土田遺跡、朝日西遺跡、清洲城下町遺跡などの、県下でも注目すべき数多くの遺跡が所在しており、私たちの祖先の事業や足跡を垣間見ることができます。

土田遺跡の発掘調査の開始は昭和56年度に遡り、名古屋環状2号線建設に伴う事前調査としてスタートしました。6年間の調査の結果、弥生時代末から古墳時代にかけての墳丘墓の確認、平安時代末から室町時代にかけての屋敷跡や遺物の検出等、多くの知見を得ることができました。

そして、平成元年度、愛知県名古屋農地開発事務所による水質障害対策事業に伴う事前調査を実施し、ここにその調査結果をまとめ報告書を刊行する運びとなりました。本書がひろく歴史研究の資料として活用されとともに、埋蔵文化財に対する御理解の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々を始め、関係者及び関係諸機関の御理解と御協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成3年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
理事長 松川誠次

例 言

1. 本書は愛知県西春日井郡清洲町大字土田に所在する土田遺跡（遺跡番号21005）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は愛知県名古屋農地開発事務所が進めている水質障害対策事業にともなうもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成元年11月から12月であり、発掘調査に引き続いて、平成2年度には報告書作成のための整理作業を実施した。
4. 発掘調査は日比宰・城ヶ谷和広が担当し、河合明美・木全左奈恵の協力を得た。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導を得たほか、清洲町教育委員会、愛知県名古屋農地開発事務所の協力を得た。
6. 調査記録及び出土品の整理等については、以下の方々の参加を得た。
木全左奈恵・河合明美・岩崎繁子・牛田長子・加賀良子・小島洋子・杉山美智子・洞地恭子・水野里美・山川和子・吉田恒美
7. 本書の執筆及び編集は城ヶ谷和広が担当したが、一部、第1章を日比宰、第3章1節・第5章2節を加藤とよ江、第4章を森勇一・前田弘子が分担執筆した。
8. 本書をまとめるに当たり、次の各氏のご指導、ご協力を得た。
伊藤実・荻野繁春・斎藤孝正・柴垣勇夫・楢崎彰一・福田正継・藤沢良祐・北条献示
（五十音順、敬称略）
9. 調査記録の座標は国土座標第Ⅷ系に準拠する。
10. 調査記録及び出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第 I 章 調査概要	
1 節 調査にいたる経緯	1
2 節 調査の経過	2
3 節 立地と環境	3
第 II 章 遺構	
1 節 基本層序	6
2 節 古墳時代の遺構	7
3 節 中世の遺構	8
第 III 章 遺物	
1 節 古墳時代の遺物	12
2 節 中世の遺物	13
3 節 その他の時期の遺物	16
第 IV 章 科学分析	
1 節 珪藻分析からみた愛知県土田遺跡における古環境	17
第 V 章 考察	
1 節 古墳時代の土田遺跡とその周辺	26
2 節 土田遺跡における中世土器の様相	32
第 VI 章 結語	47
付表	51
図版	59

図版目次

図版 1	遺構図 (1) 遺構全体図・A区遺構図	図版11	遺構写真 (1) A区全体図他
図版 2	遺構図 (2) B区遺構図	図版12	遺構写真 (2) B区全体図他
図版 3	遺構図 (3) C区遺構図	図版13	遺構写真 (3) C区全体図他
図版 4	遺物実測図 (1) 中世の遺物 (1)	図版14	遺構写真 (4) B区遺構検出状況他
図版 5	遺物実測図 (2) 中世の遺物 (2)	図版15	遺物写真 (1) 古墳時代の土器 中世の土器 (1)
図版 6	遺物実測図 (3) 中世の遺物 (3)	図版16	遺物写真 (2) 中世の土器 (2)
図版 7	遺物実測図 (4) 中世の遺物 (4)	図版17	遺物写真 (3) 中世の土器 (3)・木製品
図版 8	遺物実測図 (5) 中世の遺物 (5)	図版18	遺物写真 (4) 墨書土器
図版 9	遺物実測図 (6) 中世の遺物 (6)	図版19	土田遺跡から産出した珪藻遺骸の顕微鏡写真
図版10	遺物実測図 (7) 中世の遺物 (7)		

挿図目次

第 1 図	遺跡位置図	1	第14図	海拔 0 m 付近の遺跡分布	26
第 2 図	調査区位置図	1	第15図	土田遺跡・廻間遺跡	29
第 3 図	周辺の地形	3	第16図	中世土器にみられる器種別割合	33
第 4 図	土田遺跡と周辺の遺跡	4	第17図	土師器皿器種表	34
第 5 図	土田遺跡基本層序模式図	6	第18図	山茶碗・皿器種表	34
第 6 図	遺構配置図	7	第19図	土田遺跡出土中国陶磁器	35
第 7 図	遺構実測図 (1) 井戸	9	第20図	供膳具にみられる時期別 ・種類別量比	39
第 8 図	遺構実測図 (2) 溝・土坑	10	第21図	土田遺跡における供膳具の変遷	41
第 9 図	古墳時代の遺物	12	第22図	土田遺跡における調理具・貯蔵具 ・煮炊具の変遷	43
第10図	草履状木製品	13	第23図	旧地形と推定街道	46
第11図	その他の時期の遺物	16	第24図	中世における遺構の変遷	48
第12図	分析資料の採取位置図	17			
第13図	土田遺跡珪藻分析結果	22			

表目次

第 1 表	発掘調査に伴う法的手続き	2	第 4 表	遺跡地名表	26
第 2 表	発掘調査行程表	2	第 5 表	調査区別中世土器出土量	32
第 3 表	珪藻遺骸リスト	20	第 6 表	時期別中世土器出土量	36

第 I 章 調査概要

1 節 調査に至る経緯

現 況 土田遺跡は、愛知県西春日井郡清洲町大字土田字九反田、小松野、角田、五反地、江之相、丁長に所在する弥生後期～中世の遺跡である。土田地区は清洲町の西南部に位置し、現在は水田の広がる閑静な田園地帯となっている。遺跡は五条川とその西方にある福田川とのほぼ中間に位置し、遺跡付近では現田面での標高 2 m 前後を測り、ほぼ平坦である。

発掘調査の開始 発掘調査の開始は、昭和56年度に遡る。遺跡の発見はこれより先、昭和53年のことで、愛知県教育委員会文化財課による環状 2 号線建設予定地内の遺跡分布調査を契機とする。そして、昭和56年度に入り、土田地区内に予定された環状 2 号線建設に伴う事前調査として、発掘調査が実施されることとなった。調査は昭和56年度から昭和59年度にかけては財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部が、昭和60年度には、新しく設立された財団法人愛知県埋蔵文化財センターが引き継ぎ、昭和61年度まで継続した。また、この間、昭和56年度には朝日遺跡群発掘調査団、昭和60年度には土田遺跡等試掘調査会による調査も行われ、当遺跡の性格とその範囲がほぼ明らかとなってきた¹⁾。

調査成果 これらの調査成果は、財団法人埋蔵文化財センター報告書「土田遺跡」等において報告されている²⁾。それらによると、土田遺跡の全体像は次のように想定される。遺跡における遺構の変遷は、大きく 2 時期に区分でき、一つは弥生時代末から古墳時代にかけての墳丘墓を中核とする「墓域」形成期であり、もう一つは平安時代末から室町時代にかけての中世期における「集落」展開期である。遺構、遺物の量から、中世期に遺跡の中心時期があり、かなりの規模の集落が、長期間に渡り展開していたと考えられる。



第 1 図 遺跡位置図



第 2 図 調査区位置図 (1 万分の 1)

第1表 発掘調査に伴う法的手続

区 分	愛知県名古屋農地開発事務所	財愛知県埋蔵文化財センター	清洲町教育委員会	愛知県教育委員会	文化庁
文化財保護法第57条の3(通知)	63.10.5	—	63.10.8 63清教第295号	63.11.10 63教文第27-297号	—
文化財保護法第57条の1(届出)	—	1.11.9	1.11.9 1清教第302号	1.12.22 1教文第27-281号	2.4.27 1委保第5-2162号
遺失物法第1条(届出)	—	1.12.27	(西枇杷島集落)届出書 1.12.27	2.2.1(認定) 2.7.17(報告)	—
埋蔵文化財保管証	—	1.12.27	—	2.2.1(認定) 2.7.17(報告)	—

契 機 平成元年度、愛知県名古屋農地開発事務所は水質障害対策事業にともない、土地内で農業用管水の埋管工事を実施することとなった。このため、愛知県名古屋農地開発事務所は、県教育委員会を通じ、発掘調査及び報告書の作成を財愛知県埋蔵文化財センターに依頼してきた。当センターではこれを受け、発掘調査を平成元年度事業、報告書作成を2年度事業として、その実施にあたった。

調査区の設定 今回の発掘調査区は、昭和56年度に朝日遺跡群発掘調査団により調査された部分の延長部に当たり、ほぼ南北に環状2号線をはさんだ長狭なものとなった。埋管工事に伴うものであるため、幅約4～5m、長さ270mにわたる細長い調査区であり、環状2号線の北部分をA区、南部分を北からB区・C区として設定した。

2節 調査の経過

法的手続 本調査に係る法的手続きは第1表のとおりである。調査区周辺が水田地帯であるため、稲刈りの終了を待ち、調査は11月中旬より開始した。

発掘調査 調査は、各調査区ともバックホウにより、耕作土を除去する作業から始めた。A区の一部に攪乱部分が見られたが、B・C区は比較的遺存状態が良好であった。遺構の検出は、表土直下の暗褐色シルト層を掘り下げる形で実施し、中世の遺物・遺構を確認した。しかし、B区においては、古墳時代初頭の土坑も見つかった。また、C区においては、南半分に黒灰色の粘質土が堆積し、湿地状になっていた可能性も考えられる。

整理作業 出土品の整理については、発掘調査終了後、洗浄・出土地点の注記等を実施し、平成2年度には報告書作成のため、遺物実測図の作成等の整理作業を実施した。

工程	期間	89		90												91			
		11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
発掘調査	A区	■																	
	B・C区	■																	
整理作業																	報告書作成		
																	報告書作成		

第2表 発掘調査工程表

表土はき 遺構検出 実測・写真撮影

3節 立地と環境

立地 尾張平野の中央をほぼ南北に流れる五条川の流域には、いくつかの遺跡が点在している。流れに沿って北から五条川を下れば、岩倉城遺跡、朝日遺跡、朝日西遺跡、清洲城下町遺跡、廻間遺跡、土田遺跡、阿弥陀寺遺跡等が視界に入ってくる。土田遺跡は、この五条川下流域の自然堤防と思われる微高地上に立地している。

地理的環境 土田遺跡の周辺では、地質調査や遺跡の立地などから、次のような旧地形が想定されている³⁾。古墳時代初頭においては、五条川は現在よりさらに西を南流し、その東には湿地帯が広がっていた。また、五条川の西側には自然堤防状の高まりが東西に展開し、土田遺跡はその微高地上に立地していた。そして、その東西には湿地帯の存在も推定できる⁴⁾。

歴史的環境 この土田遺跡で初めて生活の痕跡が認められるのは弥生時代末であり、出土遺物・遺構からその最盛期は古墳時代初頭であると思われる。土田遺跡周辺の弥生時代～古墳時代の遺跡に目を向けると、現五条川をはさんで朝日遺跡（西春日井郡清洲町・春日町・新川町・名古屋市西区）、土田遺跡のすぐ北東には廻間遺跡（西春日井郡清洲町）、南西には阿弥陀寺遺跡（海部郡甚目寺町）が存在する。縄文時代後期から古墳時代初頭まで続いた朝日遺跡では、環濠に囲まれた北集落・南集落の2つの居住城と方形周溝墓群とが区分して営まれており、尾張平野における拠点的な弥生集落と考えられている⁵⁾。土田遺跡とは湿地帯をはさんで立地する廻間遺跡は、古墳時代初頭の集落遺跡を基本とする。東西に向かっ

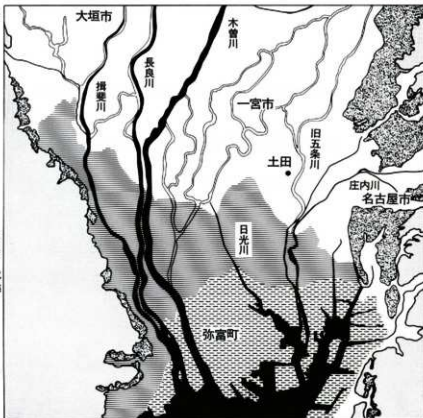
第3図 周辺の地形

(白ぬきは復元河川流路)

注3) 海津1988をもとに作成

■ 古墳時代初頭の海
 ■ 奈良時代以降の海

0 5 km





第4図 土田遺跡と周辺の遺跡
(国土地理院 1 : 25000 清洲)

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 土田遺跡 | 8 方領遺跡 |
| 2 朝日遺跡 | 9 森南遺跡 |
| 3 朝日西遺跡 | 10 阿弥陀寺遺跡 |
| 4 清洲城下町遺跡 | 11 法性寺 |
| 5 外町遺跡 | 12 大洲遺跡 |
| 6 松の木遺跡 | 13 基目寺 |
| 7 堀間遺跡 | 14 清林寺 |

て伸びる旧河道の南側には住居がほぼ東西に配置され、さらにその南側には墳丘墓が造営されるといふ集落構造を持つものである⁶⁾

古 代 古代になると、近くに基目寺等の寺院が造営され、集落も清洲城下町遺跡、大洲遺跡などで比較的主として展開しているが、土田遺跡の周辺では遺物が散見するのみである。

微高地の安定 古代末期になると微高地以外の部分が水没し、止水的环境下での粘土の堆積により、土田遺跡周辺の湿地帯が次第に埋まっていく。こうした古代末期の堆積環境の変化が、五条川流域の大規模な自然堤防の発達をもたらす。こうして形成された自然堤防、微高地が安定し、現在の自然地形にかなり近い状況になったのが中世初頭であったと考えられる。

中 世 土田遺跡では、古代以後の空白期間の後、中世になると再び人々の生活の跡が見られるようになる。土田遺跡周辺の中世遺跡としては、朝日西遺跡（西春日井郡清洲町）、森南遺跡（海部郡甚目寺町）、阿弥陀寺遺跡（海部郡甚目寺町）などがあげられる。朝日西遺跡は、五条川東岸の自然堤防上から後背湿地にかけて立地する⁷⁾11世紀後半から15世紀前半にかけての集落遺跡である。12世紀後半ごろが集落の出現確立期であり、自然堤防の西側を中心に屋敷地を区画する巾2.5mほどの溝が掘削されはじめる。14世紀後半から15世紀になると新しい屋敷地が設定されて、集落の再編成の時期を迎える。森南遺跡は福田川西岸の北西に走る独立した微高地上に立地し、その最盛期は14世紀後半から15世紀前半である。微高地南縁沿いに巾5mを超える大溝が走り、居住域を区画している⁸⁾。阿弥陀寺遺跡は田福田川の西岸の微高地上に立地する⁹⁾。遺跡の最盛期である14世紀には、広範囲に渡り屋敷地を区画する溝が見られ、その方向は周囲の条里の影響を受けている。これらの中世集落はすべて、15世紀前半以降姿を消していく。土田遺跡における中世集落も例外ではない。12世紀に遺構が出現するが、14世紀末から15世紀にかけては、集落としての機能をほぼ失い、畑地、荒地化していく。これらは、おそらく全国的に見られる集村化による結果であり、

「清須城下町」の形成後の「清須城下町」の形成へとつながっていくものと考えられる¹⁰⁾

〔注〕

- 1) 赤塚次郎他 1987『土田遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 2) 高橋信明 1982『土田遺跡』朝日遺跡群発掘調査団
高橋信明 1983『土田遺跡II』朝日遺跡群発掘調査団
高橋信明 1986『土田遺跡範囲確認試掘調査』土田遺跡等試掘調査会
- 3) 井関弘太郎 1983『沖積平野』東京大学出版会
海津正倫 1988『濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形発達』『名古屋大学文学部研究論集（史学）』P.285～303
- 4) 注1に同じ
- 5) 石黒立人他 1991『朝日遺跡I』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 6) 赤塚次郎 1989『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 7) 石黒立人 1989『阿弥陀寺遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 8) 金原宏他 1984・1985『朝日西遺跡』『年報II・III』財団法人愛知県教育サービスセンター
- 9) 加藤安信他 1990『森南遺跡』甚目寺町教育委員会
- 10) 佐藤公保 1989『清須周辺の中世村落』『清須—研究報告編—』東海埋蔵文化財研究会 P3～11

第II章 遺 構

1 節 基本層序

今回の調査地点はほぼ南北に設定されている。現況の地表は北端が標高約2.4mで南に行くにしたがって緩やかに標高が減じていき、南端では約1.5mを測る。

基本層序 基本層序としては、まず第I層（表土層、耕作土層）があり、それを取り除くと中世の包含層である第II層（暗褐色シルト層）が堆積している。その下の第III層が遺構面である灰色、灰褐色シルト層である。第IV層で地山である砂層となる。

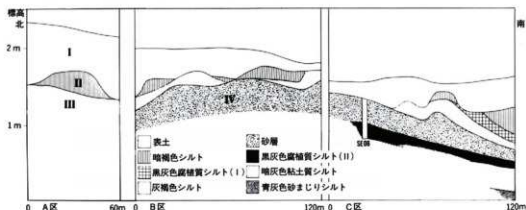
第I層は水田及び畑の耕作土で平均30～50cmの厚さがある。

包含層 第II層が包含層となるが安定した堆積ではなく、調査地点中央部から南部では後世の削平により、ところどころに10～20cm見られるのみである。調査地点南部のC区では粘質が強くなり遺物をほとんど含まない。

第III層は古墳時代から中世の遺構面となる灰色、灰褐色シルト層である。北部は30cm以上の厚い堆積がみられるが、中央部は古墳時代から中世の段階で削平を受けているものと思われ、地山の上に直接包含層が堆積している。この包含層は基本的には地山の起伏に沿って約20cmの厚さでみられる。南部ではII層とIII層の中間に黒灰色腐植質シルト層（I）がみられ、遺構形成期に滞水状況にあったことを示している。

地 山 第IV層は調査地点のほぼ中央で大きく盛り上がり、上面の標高は約1.6mを測る。南にいくにしたがって標高が下がり、調査区南端では約0.7mとなる。その下に順に黒灰色腐植質シルト層（II）、暗灰色粘土質シルト層、青灰色砂混じりシルト層がみられる。

検出面 遺構検出は第III層上面となるが、すでに第III層が削平されているところでは第IV層の地山が検出面となる。古墳時代の遺構と中世の遺構はほぼ同一レベルで検出されるが、古墳時代の遺構は希薄である。遺物のなかには古代のものもあるが、遺構は不明である。



第5図 土田遺跡基本層序模式図

2節 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は希薄で、B区の中央部で検出されたもののみである。この地点は地山である砂層と第Ⅲ層の灰褐色シルト層が盛り上がり標高約1.7mを測る高まりの部分である。遺物も当該期のものがみられるのはこの地点だけである。この時期の遺構として確実なのはSD101があげられる。

溝 SD101 (第8図-1, 図版11-3)

SD101は中世の溝SD17、およびSE03によって切られており、ほとんど調査区東側のセクション断面により観察されたのみである。B区の中央部では灰褐色のシルトがやや厚く40cmほどあり、SD101はこのシルト層を切り込んでいる。検出当初は2基の土坑として別々にとらえられたが、埋土や堆積状況がほぼ同じで、規模・掘形がきわめてよく類似していることから同一の溝の部分である可能性が高い。上部は削平されていると思われるが、現況では幅約2m、深さ約60cmである。前に報告された地点では地山の高くなった部分に古墳がみられたことから¹⁾、今回の遺構も古墳の周溝である可能性もある。溝の底部直上からそれぞれ古墳時代初頭の土器が見つまっている。

古墳の周溝

3節 中世の遺構

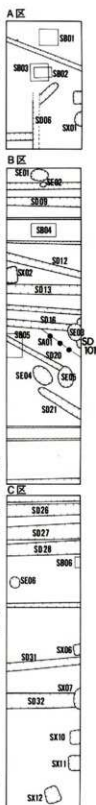
中世の遺構には建物跡6棟、井戸6基、溝32条、柵列1列、そのほか土坑、ピット多数がある。遺構は調査区全般にわたって検出されたが井戸等は中央部分に集中し、墳墓と考えられる土坑は南部に集中する傾向にある。時期区分については第Ⅴ章考察のところ述べるが、遺構、遺物のあり方から4時期に区分した。以下、代表的な遺構についてのみ順を追って説明し、それ以外のものは巻末の付表に記した。

1. 建物跡

建物跡は調査区北部のA区に3棟、B区中央部に2棟、C区の北端に1棟の6棟が検出された。調査区の幅が約4mと狭いため建物の全容を知ることができないものはない。6棟とも掘立柱建物であるが、柱穴の掘形は余り大きくない。ただ、SB06のみは掘形もしっかりしており主建物となる可能性もある。主軸の方向はすべて東西棟と思われるが、ほぼ東西のものと10°ほど振れるものとに分かれる。遺物はほとんど出土しておらず時期を判定する材量は少ない。

SB02, 03

SB02, 03はほぼ同じ地点にたてられた建物であるが、SB02は3間、SB03は2間の建物である。両者は切りあい関係を持たず、柱間も若干違っている



第6図 遺構配置図

が主軸の方向はほとんど同じでなんらかの形で関連があると思われる。

SB06 (図版13-4)

SB06の柱穴は直径約50~70cmの円形でしっかりとした掘形を持つものである。柱穴の深さは約40cmで柱痕らしいものもみられた。

2. 井戸

井戸はB区の北端に2基、南端に3基、C区北部に1基が見ついている。掘形はすべて素掘りの井戸で構造物は外枠と曲物を持つもの(1基)、曲物だけのもの(3基)、構造物のないもの(1基)、不明(1基)に分類される。

SE01 (第7図-1、図版13-3)

井戸枠 SE01はB区の北端に位置する井戸である。掘形は一辺約2.8mの方形で、中の構造物を比較的良好に残していた。井戸枠は1組のほぞ加工をした4本の横板を組み、それに沿って縦板をそれぞれ3枚張り合わせたもので、この構造が2段にわたって組まれていた。底部には曲物がすえられていた。曲物は、板の内側にたて方向の切れ目をいれて折曲げ、革紐で綴じたものである。出土する遺物は山茶碗が多いが比較的新しいものが中心で時期は、Ⅲ期と考えられる。

SE02 (第7図-1)

SE02はSE01に近接して作られている。大きさは直径約1m。浅いところで基底部にすえられていた曲物が検出されている。遺物はなく時期は不明である。

SE03 (図版11-5)

SE03は直径約2.5mをはかるが、そのほとんどをSD16に切られており、遺物はあまり出土しなかった。また、この地点は湧水が激しくさらに掘り下げて構造物を確認することができなかった。SD16出土遺物から判断してⅢ期にはいるものと思われる。

SE04 (第7図-2、図版12-3・4、14-3)

廃棄土層 SE04は長径3.2m、短径2.6mの楕円形のプランを呈する。上面には暗褐色の廃棄土層があり、多くの遺物が出土している。基底部には曲物が2段ですえられていた。曲物の構造はSE01と同じである。遺物からみてⅡ期にはいるものと思われる。

SE05 (第7図-3、図版12-5、14-3)

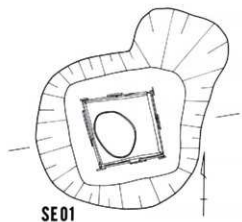
廃棄土層 SE05は調査区の東端にあり一部は調査区外となる。直径は3.5mでSE04と同様、上層に暗褐色廃棄土層をとめない、そこからは遺物が多く出土した。掘形は緩やかで基底部には1段の曲物がすえられていた。遺物からみてⅡ期に属するものと思われる。

SE06 (図版12-6)

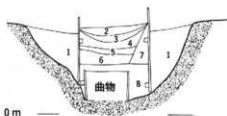
SE06は唯一、C区から検出されたものであるが構造物は見つからなかった。出土遺物もほとんどなく時期は確定しにくい。

3. 溝

検出された溝は全てで32条を数える。最も大きなものは幅3mをこえるが、全体的にみれば幅約2~2.5mの一群と幅約1m前後の一群に分かれる。方位は東西方向のものがほと



SE01

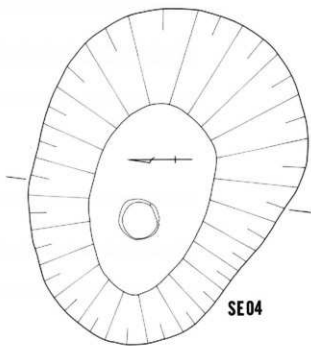
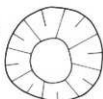


0 m

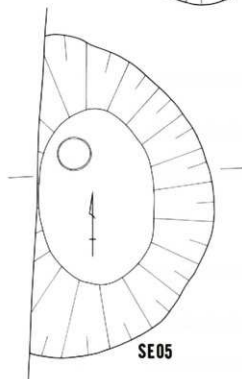
1. SE01-02

- | | |
|----------|----------|
| 1 灰褐色砂質土 | 5 茶褐色砂質土 |
| 2 茶褐色シルト | 6 暗灰色粘質土 |
| 3 茶褐色粘質土 | 7 淡灰色砂質土 |
| 4 褐色粘質土 | 8 灰色砂 |

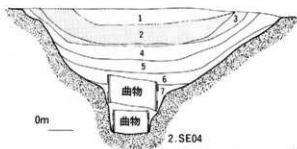
SE02



SE04



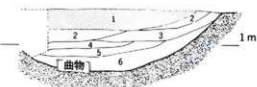
SE05



0 m

2. SE04

- | | |
|-----------------|------|
| 1 暗褐色シルト | 商業土層 |
| 2 灰褐色シルト | |
| 3 灰褐色シルト (鉄分多い) | |
| 4 暗灰色粘質土 | |
| 5 暗灰色粘質土 | |
| 6 灰色砂+暗灰色粘質土 | |
| 7 灰色砂 | |



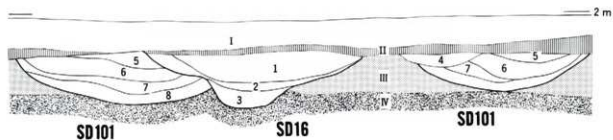
1 m

3. SE05

- | |
|-----------------|
| 1 灰褐色シルト (商業土層) |
| 2 暗灰色砂まじりシルト |
| 3 暗灰色シルト |
| 4 茶褐色砂質土+灰色シルト |
| 5 茶褐色砂質土 |
| 6 暗灰色粘質土+砂 |

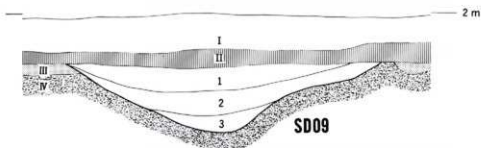
第7図 遺構実測図(1) 井戸

0 2 m



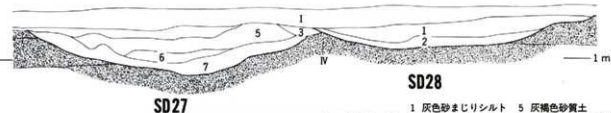
1. SD101・SD16

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 暗灰褐色シルト | 5 暗茶褐色シルト |
| 2 灰色シルト | 6 褐色シルト |
| 3 暗灰色粘質土 | 7 淡灰色シルト |
| 4 灰色シルト | 8 淡茶褐色シルト |



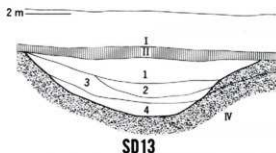
2. SD09

- | |
|--------------------|
| 1 暗灰褐色シルト |
| 2 灰褐色シルト (下部に沈鉄あり) |
| 3 暗灰色粘質土 |



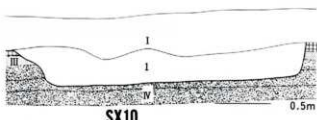
3. SD27・28

- | | |
|-------------|----------------|
| 1 灰色砂まじりシルト | 5 灰褐色砂質土 |
| 2 灰色シルト | 6 灰褐色シルト + 灰色砂 |
| 3 暗灰色シルト | 7 灰褐色シルト |
| 4 暗褐色砂質土 | |



4. SD13

- | | |
|-----------|----------|
| 1 暗灰褐色シルト | 3 灰褐色シルト |
| 2 暗灰色シルト | 4 暗灰色シルト |



5. SX10

- | |
|----------------------------|
| 1 灰褐色粘土、黒灰色粘土ブロック
砂まじり層 |
|----------------------------|



- | |
|----------------|
| I 表土 |
| 基本層序 II 暗褐色シルト |
| III 灰褐色シルト |
| IV 灰色砂 |

第8図 遺構実測図(2) 溝・土坑

溝の方位 んどでN-90°のものが最も多い。しかし、I期の溝は方位がほぼ北東、N-30°-50°を指すものが多く、II期以降との間に方位に関する不連続がみられる。

SD12

SD12は幅約1.2mで北東に走る溝であるが、深さは約0.2mと浅い。この溝はSD20、SD21と平行に走るようにあるが、幅や深さが浅いことなど似ている要素が多い。三者は出土遺物から見てもI期に位置づけられるものと思われる。

SD09 (第8図-2、図版11-4)

SD09は最も規模の大きい溝で、幅3m、深さ1mを計る。底部には暗灰色の粘質土が堆積し、その上に鉄分の沈澱がみられる。遺物は比較的多く出土したが、中心となるのは山茶碗でIII期のものが多い。

SD25~28 (第8図-3、図版13-5)

これら4本の溝は近接して存在し、規模・方位ともによく似ている。しかし、SD27のみはSD28にきられており、出土遺物もI期に入り古い様相を呈する。それ以外の溝は出土する遺物もIII・IV期のものであるが、何等かの関わりがあるかもしれない。

4. 土 坑

土坑は多数検出されたが、はっきりと性格がわかるものは少ない。ただ中世において注「方形土坑」目すべきものに「方形土坑」がある。今回の調査でも調査区南部のC区に多くみられた。規模は約3m×2mの長方形がほとんどであるが、やや楕円形を呈するものもある。主軸の方向は南北をとるものが多い。C区南部では等間隔に縦に並んでいるかのような印象を受ける。埋土は他の遺跡で見つかるものと同様に単一で大きな地山ブロックなどを含み短期間で埋められたことがわかる。遺物が少なく、時期がわかるものは多くない。

SX01 (図版14-1)

SX01は典型的な方形土坑の埋土を持つものである。一部は調査区外にはみ出しているがプランは長方形になるものと思われる。出土遺物は全くなく時期は不明である。

SX10 (第8図-5)

SX10は一辺約3.2mの長方形プランで方位はほぼ南北を向いている。埋土は地山ブロック、黒色土ブロックを含む典型的な方形土坑である。時期は不明である。

SX12 (図版14-2)

SX12も方形土坑であるが調査区最南端に位置している。この周辺は遺構がほとんどなく湿地状のところへ掘り込んだものである。プランは不整形で掘形もやや浅い。出土遺物は少なかったが、土錘、山茶碗などが出土し、III期になる可能性がある。

注

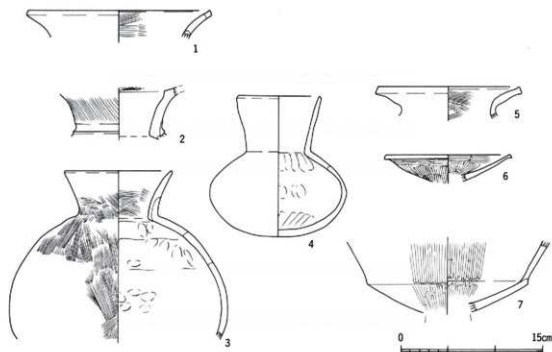
1) 赤塚次郎他 1987『土田遺跡』財団法人 愛知縣埋蔵文化財センター

第三章 遺物

1節 古墳時代の遺物

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物は、調査区が狭く、また当該期の遺構も稀薄なため非常に少ない。出土地点も大半が微高地に当たるB区の南寄りからと限られている。このうち、図示し得た遺物は以下の7点である。1のみがA区からの出土、他はB区からの出土である。2は広口壺、口縁部には稜を有し、内面には縞描紋を施す。3・4・6は墳丘墓の周溝と考えられるSD101から出土した短頸壺、直口壺、器台である。壺2点供 献 用 については表面がやや磨滅している。これらの土器はおそらく供献用として用いられたものと考えられる。7は高杯の杯部下半である。明瞭な稜を有しており、他の遺物と比べやや古い様相を呈する。

今回の調査区に限らず、これまで調査された土田遺跡全般の特徴としては、壺・高杯などと器種が限られていることがあげられる。遺物の時期としては、7が弥生時代後期末の週間I式ほかは、古墳時代前期初頭、週間I式期の段階に位置付けられよう。



第9図 古墳時代の遺物

2節 中世の遺物

中世の遺物には土器、陶磁器などの土器類及び木製品がある。遺物全体の量はあまり多くなかったが、遺構からまとまって出土したものもいくつかあり、比較的良好な資料を得ることができた。

土器類 土器類には土師器、白瓷系陶器（山茶碗、以下山茶碗という）、施釉陶器、常滑、輸入陶磁器、土製品、加工円盤等がある。土師器は量的に多くを占めるものではないが皿、鍋、釜等が一定量みられる。山茶碗には碗、小皿、こね鉢があるが量的には碗・皿が大多数を占め、遺物全体の割合でみても90%以上となる。施釉陶器はすべて瀬戸・美濃産である。器種としては碗、平碗、天目茶碗、皿、鉢、四耳壺などがある。常滑は甕、壺、羽釜などがある。輸入陶磁器は全てが中国陶磁で青磁と白磁がある。器種は碗、皿のみである。土製品には陶丸、土鉢等がある。加工円盤は山茶碗等の底部を2次的に加工したものである。

木製品 木製品には曲物の底板、栓、箸等の食膳具や草履状木製品等の装身具、加工部材などがある。全体的な残存状況はよくないがS E 01は比較的残りはよかった。

出土遺物は前述のとおり4時期に区分し、代表的な遺構ごとに述べるが、それ以外は遺物観察表に記した。

1. 井戸出土遺物

S E 01

土器類 (図版4-8~28)

S E 01からは土器類では土師器皿、山茶碗、小皿、加工円盤などが出土した。

土師器皿は口径約12cm、器高約3cmで手づくねの成形である。底部内面は一定方向のナデをする。27は内面にススが付着する。

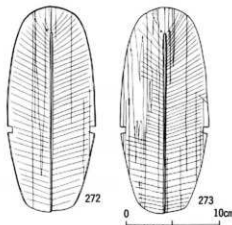
山茶碗は高台のあるものとなないものがある。両者とも体部が比較的直線的に立ち上がる砂粒を多く含むものである。口径は約13cm~13.5cm、器高約5.5cmである。なかには17のように胎土が緻密なものも少しみられる。小皿は底部に回転糸切り痕を残し、内面の中心部を指ナデするものである。8と19は底部に墨書がある。両者は書き方、線の太さなどは違うが同じものを表している可能性もある。

木製品 (図版10-272~274, 266~279, 281)

S E 01の井戸枠の中の粘質土からは自然木に混じって種々の木製品が見つかった。

272, 273は板金剛と呼ばれる草履状木製品である。板金剛は2枚の薄い板を芯にして表裏に葉等を編んで鼻緒をつけた履物の一種で絵巻物などにもみえている。広島県の草戸千軒町遺跡などでたくさん見つかったが、

板金剛



第10図 草履状木製品

この周辺では余り類例がない。残存状況は非常によく両者とも完形である。長さ約21cm、幅約10cmで、形態は端部が丸みを持って仕上げられ、先端部内側には小孔が開けられ、外側には方形の切り取り部分がある。表裏面とも成形時の痕跡が明瞭に観察される。両者はほぼ同じ形をしており左右一対をなしていたものと思われる。

それ以外の遺物では274は何かの底板と思われるが、裏面にはススのようなものが全面に付着している。表は削り痕跡が明瞭である。箸は16cm～18cmのもので両端が細くなっている。281は柱状の木製品で、中央よりやや上で横方向に切り目が入っており、それより下は全体的にやや細くなっており、栓と考えられる。

遺物は比較的多くまとまっておりⅢ期に属するものと思われる。

SE04 (図版4-32～図版5-79)

SE04はⅡ期の良好な資料を出土した遺構である。遺物は井戸の上層の暗灰色シルト層からまとまって出土した。埋土の状態から一括して廃棄された可能性がある。山茶碗の他には土師器皿、鍋、施釉陶器鉢、常滑甕、羽釜、加工円盤等が出土している。

土師器皿(74)は口径が約7.8cmと小さく器高も約1.3cmである。成形は手づくねである。

【伊勢型鍋】75は小片であるがいわゆる「伊勢型鍋」と言われるものである。口頸部外面下にはススが付着している。

山茶碗の製作は比較的丁寧である。42、44の様古い形態のものもみられる。皿は高台のつくものとつかないものとに分かれる。高台がつかないものでも体部が比較的深く古い様相を呈する。32には「井」と読むことの可能な墨書がある。出土した地点が井戸である

墨書土器

ことから、井戸に関わる意識的な投棄と考えることも可能である。墨書土器はもう2点あり、33の小碗の底部には「十」と書かれている。他の1点は50の皿で、「犬法師」と書かれ

【犬法師】

ている。この文字が「犬法師」という固有名詞を表すのか、「法師」という文字と接頭語としての「犬」が組み合わせられたのかわからないが興味深い例である。なお、この皿は焼成の時点で底部に亀裂が入っており、液体の使用には耐えないものである。こね鉢は口縁部に面を作らない端部の丸いもので、口径が約27～8cmのもの約34cmのものに分けることができる。胎土は砂粒を多く含み、輪積み痕をはっきり残すものもみられる。

常滑製品には山茶碗以外に70～71の羽釜と72、73などの甕がみられる。羽釜は外面灰色の硬質の焼き上がりで、鈔の部分折り曲げた後、口縁部をつけたす形で成形されている。甕(72)は外面に緑色の自然釉がかかる。73は甕の底部と思われる破片である。

加工円盤はすべて山茶碗の高台部分を利用して製作され、器面はよく摩滅している。

2. 溝出土遺物

SD09 (図版6-80～127)

SD09の上層南側からはまとまって山茶碗・皿が出土した。

山茶碗は体部が直線的なもので、口径に比して器高の高いものが多い。胎土は砂粒の多いものが中心であるが98～101のような均質なものも混じっている。皿には口縁部が面取りされているものと丸く仕上げるものがある。山茶碗のなかには墨書されたものもみえる。碗

では89は「人」、90では中心部に小さく「大」とかかっている。

山茶碗以外では土師器皿、陶丸、青磁等がある。土師器は手づくねで口径約10cm、深さ約2.5cmの深目のもの(124)と口径約9cm、深さ約1cmの浅目のもの(125)がある。126は龍泉窯系の青磁碗で、外面に連弁文が彫り込まれている。陶丸は直径約2.5cmで、貫通しない穿孔が一つ所みられる。Ⅲ期に属するものと思われる。

SD06 (図版7-128~141)

SD06には若干下がると思われるようなものも混じっているがほぼⅢ期と考えてよい。中心となるのは山茶碗であるが、なかには龍泉窯系・同安窯系の青磁碗(137, 138)なども含まれる。138は内面に葡萄の文様を持つ。

SD16 (図版7-142~153)

SD16出土物の中心となっているのはⅢ期の遺物である。150は土師器で柱状のものである。ロクロを使って成形し、底部を回転糸切りで切り離している。体部上面はロクロ目がはっきりしており、ススが付着している。152の加工円盤は山茶碗の底部を利用して作られたもので、かなり摩滅している。

SD13 (図版7-159~164)

SD13はⅣ期の遺物を出す遺構である。Ⅳ期の資料は全体的に乏しいが、この溝は数少ない中の一つである。160は山茶碗皿であるが、胎土は均一で薄く器高も低く、終末期に近い形態のものである。162もSD16のものと同様にロクロ成形、回転糸切りによる切り離しのものである。体部は中空になっている。163はいわゆる「古瀬戸」灰釉平碗である。釉調は淡黄緑色で光沢がある。

SD27 (図版8-172・173)

SD27から出土した遺物は少ないが、山茶碗皿に高台がついており、数少ないⅠ期の資料である。173は白磁玉縁口縁碗である。内面から口縁部にかけて施釉されている。

3. 土坑出土遺物

SK37 (図版8-177~188)

SK37はSE04に切られている土坑で、出土する遺物は山茶碗がほとんどである。なかには180のようにかなり重みの激しいものも使用されていたことがわかる。また180は体部の一面にススが付着している。179の内面にもススが付着している。188は常滑産の羽釜である。口縁端部が少し屈曲しながら上に伸びている。Ⅱ期に含まれる。

3節 その他の時期の遺物

出土する遺物はほとんどが中世のものであるが、それらに混じて若干他の時期の遺物が出土している。遺構に伴うものはないが図示できたものについて少し説明を加える。

1. 古代 (第11図-254~265)

古墳時代後期を含めて飛鳥時代から奈良・平安時代の遺物に須恵器・土師器がある。こ

これらの遺物が出土する地点は調査区北部のA区南部、中央部のB区中央部から南部である。

254～256は須恵器蓋杯で、いずれも調査区北部のS D 06から出土したものである。口径も大きく比較的古い様相を示し、6世紀中葉に遡るであろう。

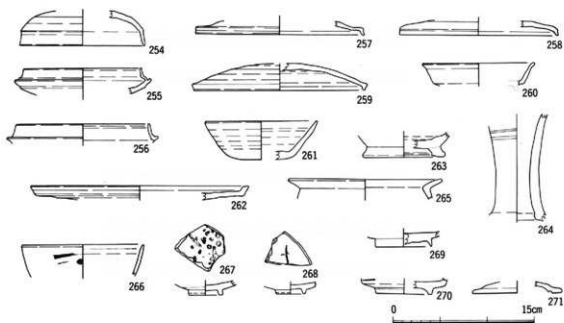
257、258、260は調査区中央部のB区のS X 02から出土したもので、260は高台の部分で欠いているが、有台杯身である。口径は約12cmと小型のもので8世紀中葉の頃のものである。262から264はS D 13から出土したものである。262は盤である。264は長頸瓶の頸部で、263が高台部分である。これらは8世紀後半の遺物である。219と265はB区のS D 16から出土したもので、265は土師器の甕である。口縁部は明瞭に折れ曲がるもので体部にハケメを持たない。

2. 近世 (第11図-266～271)

中世でも15世紀になると遺構が若干散見するのみで、それ以降の近世の遺構は全くみられない。遺物も該期のものはきわめて少なく生活を感じさせるものはない。

注

1) 籠原芳美 1985「草戸千軒町遺跡出土の草履状木製品-芯板について-」『草戸千軒』NO.139



第11図 その他の時期の遺物

第IV章 科学分析

1 節 珪藻分析からみた愛知県土田遺跡における古環境

1. はじめに

1989年度に行われた愛知県西春日井郡清洲町の土田遺跡発掘調査に際して、遺跡の土層断面および深掘りトレンチより採取した試料の珪藻分析を実施し、遺跡立地と古地理の復元を試みたのでその概要をここに報告する。

2. 試料の採取と処理

土田遺跡は標高3～4 mに立地する古墳時代～中世にかけての遺跡である(第12図)。分析を行った試料は、89B区深掘りトレンチより3試料(A～C)および89C区南端部の遺跡土層断面より26試料の計29試料である。層準と柱状図は第13図に示した。試料A～Cについては標高-1.5m、-0.5m、0 mの地点より、また試料1～26については89C区の標高0～1.3mの土層中より5 cm間隔で採取した連続サンプルである。

試料の分析にあたって、乾燥重量1 gをトルビーカーにとり、過酸化水素水(35%)を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行った。岩片除去ののち、水洗を4～5回くり返ししながら、同時に比重選別を行った。分離した試料を希釈し、マウントメディア(和光純薬製)にて封入した。

検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個の珪藻殻を同定した。しかし、試料中に含まれる珪藻殻が極端に少ない場合は、200個に達しなくても検鏡を打ち切った。また、珪藻殻数の算定は、400倍で複数枚のプレパラート中の6走査線以上を検鏡し、鏡下に出現した個数と試料の希釈率から算出した。

3. 群集組成解析の方法

Hustedt (1930, 1937-1938, 1927-1966)、Cholnoky (1968)、Desikachary (1987・1988・1989)、Foged (1954)、Hendey (1964)、Patrick and Reimer (1966, 1975)、Schoeman (1973)らは、ヨーロッパ・アメリカおよび世界各地の湖沼や河川、沿岸地帯における珪藻の生態や分類学的研究を行い、水素イオン濃度(pH)、止水域と流水域との違い、珪藻の生態性、塩分濃度などの生態値を求め、珪藻と水質との関係を論じている。

筆者もまた近年、愛知県を中心とした遺跡産の珪藻分析を実施し、その分析結果を報告してきた(森：1989a, 森：1989b, 森・伊藤：1989a, 森・伊藤：1990a, 森・伊藤：1990b)。本論では、これ



第12図 分析試料の採取位置図

らの研究成果をもとに珪藻遺骸の群集組成の解析と古環境の推定を試みた。

4. 珪藻遺骸群集

試料中より出現した珪藻遺骸は、試料A～Cでは28属91種(9変種を含む)、試料1～26では37属156種(9変種を含む)であった。そのリストを第3表に、生態値の百分率と出現頻度等を第13図に示した。珪藻の群集組成と出現頻度等の結果から、分析試料は下位よりI・II・III・IVの4珪藻帯に区分される(第13図)。以下に、珪藻の群集組成の特徴を各帯ごとに簡単に記す。

I帯(試料A～C)

出現傾向が異なるため、I帯をさらにI a帯・I b帯・I c帯の3帯に区分した。つきにそれぞれについて述べる。

I a帯(試料A)

含有殻数は 9.7×10^5 個/g、出現種数は60種であった。とくに優占する種はみられないが、*Thalassiosira bramptonae* (8%)、*Rhaphoneis surirella* (6%)、*Cyclotella striata* (4%)などの真～中塩性の種群が26%出現したことが特筆される。

I b帯(試料B)

含有殻数は 1.7×10^5 個/gで、全層中でもっとも少なかった。出現種数は14種であった。*Cymbella turgidula*、*Gomphonema angustatum*、*Synedra ulna*など淡水域に生息する種群がわずかにみられたのみである。I a帯でみられたような真～中塩性の種群は認められなかった。

I c帯(試料C)

含有殻数は 1.8×10^5 個/gであった。I b帯と同様、珪藻の保存状態は悪い。出現種数は50種であった。*Cymbella turgidula* (12.5%)、*Gomphonema clevei* (10.5%)、*Synedra ulna* (10%)等の淡水生で付着生の種群が全体の82%を占めた。群集組成の特徴は、pHについては好アルカリ性種(43%)と不定性種(46%)で大部分が占められたが、*Ennotia*属などの好酸性の種群も9%出現した。水流性については、止水性種および流水性種がそれぞれ22%および13%出現した。

II帯(試料1～10)

II a帯(試料1～3)

含有殻数は平均 3.5×10^5 個/g、出現種数は39種であった。II a帯では、*Melosira* sp.-A (65%)がきわめて多く出現したことが特筆される。本種は、朝日遺跡62A区基盤層の標高0mの砂層(放射性炭素年代値で 3790 ± 90 y.B.P.という測定結果が得られている)中より見いだされたもの(森・伊藤, 1989a)と同種であり、ほかにも筆者の一人森は、佐織町および岡島遺跡におけるボーリング試料の海～汽水成の地層中よりこの種を確認している(森, 1989b; 森・伊藤, 1990a)。本種は小杉(1988)が汽水泥質干潟指標種群の指標種の一つとしてあげている*Melosira* sp.-nと同一種である。ほかに海～汽水産の*Nitzschia granulata*や*N.cocconeiformis*、*Diploneis smithii*などが随伴した。

II b帯(試料4～6)

含有殻数は 3.3×10^6 個/gで、保存状態は良好であった。出現種数は78種である。pH・水流ともに不定性で底生種の*Diploneis ovalis* (20%)が優占して出現した。他に*Melosira* sp.-A (9%)、感潮域や富栄養の条件下に好んで生活するとされる*Rhopalodia gibberula* (6%)が伴われた。

II c 帯 (試料7~10)

含有殻数 2.6×10^3 個/g、出現種数は93種であった。優占種はとくに見られないが、これまで10%未満の出現率であった*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia subcapitata*などの、水分の少ないところでも生活することができる陸生珪藻(好気性珪藻)が26%出現したことがII c 帯を特徴づけている。ほかに*Rhopalodia gibberula*(5%)や浮遊生の*Melosira ambigua*(5%)がみられた。II a 帯・II b 帯に多く認められた*Melosira* sp.-Aは、本帯ではわずかに3%出現したのみであった。

II 帯全体を通してみると、汽水生種の*Melosira* sp.-Aの出現率が上位にむかうにつれて減少し、かわってやや塩分の残る汽水的環境や富栄養の水域を好んで生活する*Rhopalodia gibberula*、*Diploneis ovalis*などが比較的多く出現するようになる。また底生種や付着生の種群も上位にむかって増加する傾向が認められるとともに、最上位のII c 帯では陸生珪藻の出現率が全体の1/4に達するようになる。

III 帯 (試料11~18)

III a 帯 (試料11~16)

含有殻数は 3.8×10^4 個/gで、出現種数は95種であった。とくに優占する種はみられないが、淡水生・付着生種の*Synedra ulna*(11%)、*Gomphonema clevei*(7%)や*Cymbella*属(11%)などが多く出現した。群集組成の特徴は、pHについては真~好アルカリ性種が46%、真~好酸性種が17%出現した。水流性については止水性種が18%、流水性種が12%で残りはいずれも不定性の種群であった。

III b 帯 (試料17~18)

含有殻数は 4.7×10^4 個/gと少なく、II c 帯の黒灰色腐植質シルト層(試料9~10)にくらべて約1/10の含有殻数であった。出現種数は42種である。群集組成の特徴としては、pH・水流性についてはIII a 帯同様、真~好アルカリ性種(59%)、不定性種(77%)が多く出現した。珪藻の生態性では付着生種(30%)が減少し、底生種(68%)が著しく増加する傾向が認められた。そして、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata*等の陸生珪藻は43%の高率を示した。

IV 帯 (19~26)

IV a 帯 (試料19~21)

含有殻数は 2.7×10^4 個/g、出現種数は56種であった。pHおよび水流性ともに不定性で底生種の*Stauroneis phoenicenteron*(12%)が比較的多く出現した。

群集組成の特徴は、pHについては不定性から好酸性の種群、水流性については真~好止水性種がめだつた。珪藻の生態性では、付着生種と底生種ではほぼ100%を占めた。陸生珪藻(好気性珪藻)は7%出現したのみであった。

IV b 帯 (試料22~26)

含有殻数は 1.5×10^4 個/gであった。保存状態が悪く、*Cymbella aspera*や*Synedra ulna*、*Gomphonema parvulum*などがわずかにみられたのみである。

5. 古環境の変遷

珪藻分析および放射性年代値などより、土田遺跡周辺における古環境の変遷のあらましについて述べる。

埋積浅谷と浜堤列

土田遺跡から2.5km北東には、弥生時代の集落遺跡として著名な朝日遺跡が位置している。朝日遺跡

において1989年度に実施したボーリング調査の結果から、標高-6m以深には「縄文海進」によってもたらされたと考えられる層厚8~9mの海成シルト層（沖積中部泥層）が分布し、その上部に層厚7~8mの中~粗粒砂層からなる沖積上部砂層が堆積していることが判明した。

これまでの調査によって、朝日遺跡付近の沖積上部砂層上面には、いくつかの異なった成因によって作られた比高差2~5mの埋設地形が認められることが明らかになってきた。その一つは、北西-南東方向に軸線を有する三本の凸状の高まり（砂堆）であり、もう一つはおおむね北東から南西方向に延びる浅谷群（埋積浅谷）の存在である。

砂堆について筆者は、軸線がこの付近を流れる河道の方向と直交することや、朝日遺跡において旧河道によって砂堆を構成する砂層が強く侵食を受けていること、土田遺跡89B区における基盤砂層の粒度分析結果が海浜砂丘の粒度組成を示すことなどより、これらの砂堆は縄文海進高潮期以降の汀線安定期に発達した「浜堤列」ではないかと推定した（森，1990）。

また、埋積浅谷の生成時期について、朝日遺跡において浅谷下底の泥炭層中より4620±90y.B.P. (GaK-13397)をはじめ計7点の4000年代を示す放射性炭素年代値が得られたこと、および現在は主に北海道や東北・中部山岳地帯などに生息する昆虫化石（アシボソネクイハムシ）が本層中より多数発見されたことより、浅谷の形成は縄文時代中期の頃の寒冷気候に対応した侵食地形であることが次第に明らかになってきたのである（森・伊藤：1989b）。

縄文時代後・晩期の頃の海浜環境

一方、土田遺跡基盤層を構成するI a帯（89B区）中の腐植質シルト層（標高-1.5m）の放射性炭素年代値が2530±190y.B.P. (GaK-14982)と求められたことより、本層の堆積年代は縄文時代晩期の頃と推定された。本層中に含有される珪藻遺骸の中に内湾指標種群の*Thalassiosira bramaputrae*や*Cyclotella striata*および海水砂質干潟指標種群（小杉，1988）として知られる*Rhaphoneis surirella*などが多数出現することから、I a帯は内湾性の浅海ないしは海水の影響を強く受けた河口域などに堆積したものであると推定される。それより上位のI b帯・I c帯中では海生珪藻がまったくみられなくなり、珪藻遺骸そのものも非常に少なくなるという事実は、本層が浜堤中の堆積物であると考えればよく理解される。

89B区の南方に約130m離れた89C区最下位（II a帯）にみられる汽水生の*Melosira* sp.-Aの多産層準（標高0~0.15m）は、89B区の浜堤前面に発達した干潟の海に堆積した地層であると考えられる。やがて、それが次第に埋め立てられていき、感潮域や塩分のいくぶん残留する富栄養水域に多く出現する*Rhopalodia gibberula*や、*Diploneis ovalis*などが繁殖するような低塩分の湿地帯に変化し、つづいてII c帯の地層が堆積する頃にはこの地域はほぼ完全に陸化し、やがて人の居住（弥生-古墳時代の頃）の痕跡をとどめるような環境に移り変わったことが考えられる。

ともあれ、土田遺跡に記録された縄文時代晩期の頃（2530±190y.B.P.）の海の証拠は、朝日遺跡における縄文時代後期（3790±90y.B.P.）のそれとともに、沖積上部砂層が三角州前置層として海域を埋積していく過程の海の証拠を示しているのではなく、沖積上部砂層堆積後ないしは堆積中に「縄文海進」とは時期を異にする海面上昇、すなわち海進が存在したことを示すものとして重要である。

なお、1985年の調査（59A区）では海生珪藻の多産する地層を削りこんだ河道の存在が確認されて

おり、土田遺跡周辺の地形発達を考えるうえで大変興味深い。

池沼～乾陸化の時代

*Synedra ulna*をはじめ付着性の種群の増加や陸生珪藻の減少によって、陸域であったところが、古墳時代以降、再び止水域に変化したことが考えられる。流れの少ない池沼には、*Eumotia pectinalis*や *Pinnularia*属の種群などの貧栄養水域を好む珪藻が繁殖していた。

その後、長い時間をかけて泥土の流れこみを受けるとともに、地表水および地下水位の低下によって、12世紀の頃（考古遺物による）には再び陸化したものと推定される。珪藻分析によって弥生～古墳時代の頃の陸域とくらべると、陸生珪藻の出現率が著しく増加しました珪藻の含有数も減少するなど、この当時の地表面はかなり乾燥した状態であったことが明らかになった。

湿地環境および田畑などへの利用

つづいてこの地域は湿地的な環境に変化したか、富栄養の水域や水田土壌中に多く出現するとされる *Amphora ovalis* var. *libyca*, *Rhopalodia gibberula*, *Neidium iridis*などの増加によって、人間活動や田畑として利用された可能性が考えられる。

IV帯を構成する試料22より上位の地層中には、珪藻殻がほとんど認められない。そのため、この頃よりきわめて乾燥した状態での土地利用が行われたものと推定される。

6. まとめ

土田遺跡89B・C区では縄文海進以降の海の証拠が認められ、とくに89C区では縄文晩期(2530±190y. B.P.)というかなり新しい時代まで海の影響を強く受けた干潟ないしは河口域のような環境が存在したことが明らかになった。

その後、土田遺跡周辺は2回の陸域を含む、止水域～湿地的な環境に変化したことが考えられる。陸化した地表面上では短時間のうちに草本植生が繁茂してやがて人の居住を許すような肥沃な大地に移り変わった。そして、人間活動に伴って地層中に多量の有機物や植物片・炭素等が混入して、考古学でいう腐植質に富んだ黒灰色の「いわゆる包含層」を形成させたことが珪藻分析によって明らかになった。

(森 勇一・前田弘子)

文 献

- 愛知県教育サービスセンター (1985), 埋蔵文化財発掘調査年報III (昭和59年度), 73-90,
安藤一男 (1986), 珪藻群集からみた埼玉県見沼低地の古環境の変遷と完新世最高海水準, 第四紀研究, 25, 165-176,
安藤一男・和田 信・高野 司 (1987), 珪藻群集からみた埼玉県荒川低地の古環境の検討, 第四紀研究, 26, 117-127,
Cholnoky, B. J. (1968), Die Ökologie der Diatomeen Binnengewässern, Cramer, Germany, 699p.
Foged, N. (1954), On the Diatom flora of some Funen lakes. *Fol. Limnol. Scandinavica*, 6, 76p.
Desikachary, T. V. (1987-1988-1989), Marine Diatoms of the Indian Ocean Region. *A tlas of Diatoms*, Madras Science Foundation Madras, pls. 1-809
Hendey, N. I. (1964), An introductory Account of the smaller algae of British coastal waters. Part V : Bacillariophyceae (diatom). Her Majesty's Stationary Office, London, 317p.
Hustedt, F. (1930), Bacillariophyta. *Die Süßwasser Flora Mitteleuropas*, 10, G. Fischer, Jena, 466p.
Hustedt, F. (1937-1938), Systematische und Ökologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra.nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. *Arch. Hydrobiol. Suppl.* 15, 131-177.
Hustedt, F. (1927-1966), Die Kieselalgen Deutschland, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der

- übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Mee resgebiete. *Kryptogamen Flora von Deutschland*, Teil 1-3, Leipzig, W. Deutschland. 920p., 845p., 816p.
- 鹿島 薫 (1986), 沖積層中の珪藻遺骸群集の推移と完新世の古環境変遷. 地理学評論, 59, 383-403.
- 鹿島 薫 (1988), 珪藻分析から復原された浜名湖の完新世における古環境変遷. *Clastic Sediments (Journ. Res. Gr. Clas. Sed. Japan.)* No. 5, 95-107.
- Kobayasi, H. (1968), A Survey of Fresh Water Diatoms in the Vicinity of Tokyo. *Journ. Bot. Japan*, 20, 93-122.
- 小杉正人 (1986), 珪藻の古生態学上の基礎的問題. *Diatom* 2, 169-174.
- 小杉正人 (1988), 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986-1988), Bacillariophyceae. Teil 1, Teil 2, *Pascher A. Süßwasserflora von Mitteleuropa*, 876p., 596p.
- 森 忍 (1981), 濃尾平野沖積層のケイソウ群集. 瑞浪市化石博物館研究報告, No. 8, 127-138.
- 森 忍 (1985), ケイソウ化石群集による土田遺跡59A区基盤の堆積環境. 愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財発掘調査年報III (昭和59年度), 219-224.
- Mori, S. (1986), Diatom Assemblages and Late Quaternary Environmental Changes in the Nobi Plain, Central Japan. *J. Earth Sci. Nagoya Univ.*, 34, 109-138.
- 森 勇一 (1989a), 町田遺跡における珪藻遺骸群集. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集, 町田遺跡報告書, 64-73.
- 森 勇一 (1989b), 佐織町史・自然編. 佐織町教育委員会, 1-27.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1989a), 古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷. 愛知県埋蔵文化財センター年報 (昭和63年度), 76-91.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1989b), 昆虫および珪藻遺骸から得られた縄文時代中期～晩期の古環境. 日本第四紀学会講演要旨集, 19, 68-69.
- 森 勇一 (1990), 遺跡の立地および地理的環境. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集, 阿弥陀寺遺跡報告書, 4-5.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1990a), 愛知県岡島遺跡における珪藻遺骸群集. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集, 岡島遺跡報告書, 43-47.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1990b), 清州城下町遺跡の中堀から検出された珪藻遺骸 (付・昆虫遺体). 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集, 清州城下町遺跡報告書, 103-108.
- 森 勇一・伊藤隆彦・永草康次・植 真美子 (1990), 濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度および鉱物組成. 愛知県埋蔵文化財センター年報 (平成元年度), 65-84.
- Patrick, R. and C. W. Reimer (1966-1975), *The Diatoms of the United States*. Monogr. Acad. Nat. Sci. Philadelphia, No. 13, Philadelphia. 688p., 213p.
- Schoeman, F. R. (1973), *A Systematical and Ecological Study of the Diatom Flora of Lesotho with special Reference to the water quality*. Pretoria, South Africa. 355P.
- 海津正倫 (1988), 濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化. 名古屋大学文学部研究論集, 285-303

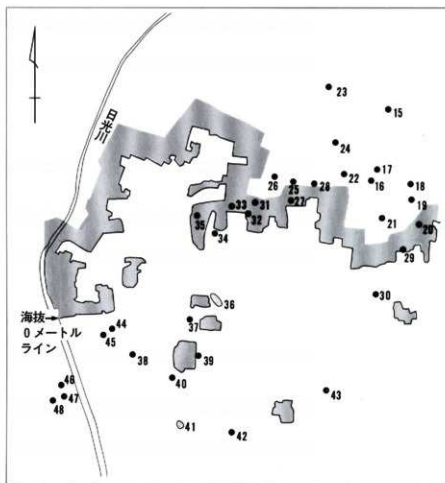
第V章 考察

1 節 古墳時代の土田遺跡とその周辺

1. はじめに

今回の土田遺跡の調査では南北に長いトレンチ状の調査であったが、これまでに確認されていた弥生時代後期～古墳時代前期、中世の遺構・遺物が検出され、土田遺跡の南北方向への広がりが確認された。うち、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての時期については、微高地上にあたるB区南半地区から遺構・遺物が確認され、当該期の遺跡範囲の広がりが確認できた。土田遺跡の周辺には、朝日遺跡、廻間遺跡、阿弥陀寺遺跡、森南遺跡など、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が存在している。また、西春日井郡清洲町付近から海部郡方面にかけて、ほぼ海拔0メートル等高線に沿って数多くの遺跡の存在が確認されている¹⁾ (第14図・第4表)

本稿では、当該期における土田遺跡の位置付けを考えるとともに弥生時代から古墳時代前期にかけての海部郡地域での遺跡のありかたについて概観してみることにする。



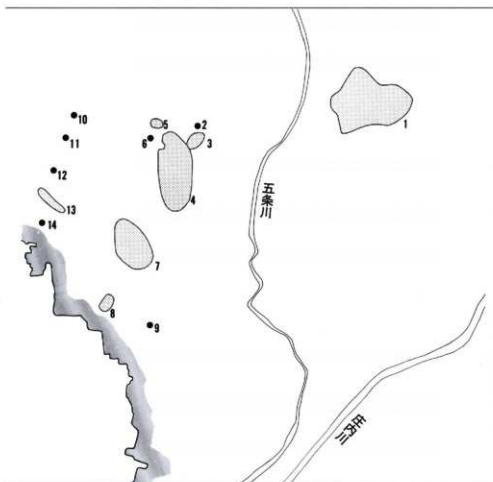
第14図 海抜0m付近の遺跡分布 (1/50000)

2. 土田遺跡との関連

前述のごとく清洲町から海部郡方面にかけての海拔0メートルラインに沿う形で弥生時代中期以降の遺跡が多く分布する。このことについてはこれまでも井関氏などにより、東西方向に走る沖積上部砂層の存在が確認されている²⁾。また、北村氏もこれに追随する形の遺跡立地の在り方を示している³⁾。それらでの共通した認識によると、沖積上部砂層の形成が行われた後に、その中に幾つかの埋積浅谷が入りこむことにより、微地形を形成したとされている。そしてそのなかの小微高地ごとを中心として遺跡の存在が確認されている。しかし、これらの遺跡については、調査などにより、遺跡の性

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	朝日	弥生前～古墳前	25	寄附	弥生後
2	松ノ木	弥生中	26	大塚古墳	古墳
3	(大塚)廻間	弥生後～古墳前	27	(大塚)廻間	弥生後
4	土田	"	28	西尾敷	弥生
5	福田	弥生後～古墳中	29	三本松	弥生中
6	郷前	弥生中	30	うしや	古墳
7	阿弥陀寺	"	31	杉ノ木	弥生後
8	大洲	"	32	高代	"
9	甚目寺	弥生後～古墳前	33	札掛	"
10	清水	弥生中	34	下都合	"
11	北浦	古墳	35	大寺	弥生後～古墳前
12	下西浦	"	36	牧野	弥生
13	森南	弥生中～弥生後	37	寺野	弥生中～古墳
14	古道	弥生後～古墳	38	蛭間	弥生後
15	寺脇	弥生中	39	観音堂	古墳
16	池田	古墳	40	光正寺	弥生
17	東高須賀	"	41	元屋敷	"
18	五反地	"	42	元柳	古墳
19	二ヶ岡古墳	古墳前	43	鎌田庵寺	弥生後
20	鬼田A	弥生中～弥生後	44	屋敷	古墳前
21	堤山	弥生後	45	奥津社古墳	"
22	薬師寺	"	46	諸桑	弥生中、古墳前
23	柳前	弥生	47	八電	"
24	辺野	弥生後～古墳前	48	諸桑古墳	古墳

第4表 遺跡地名表



範囲などについてある程度理解されている遺跡はほとんど無い。

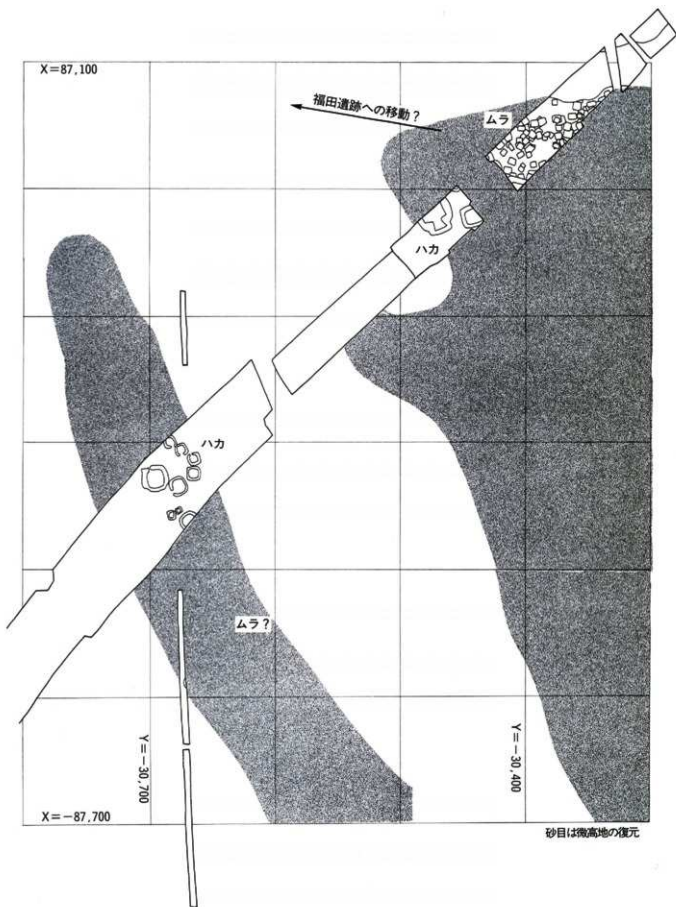
そこで、すでに調査され、報告書も刊行されている廻間遺跡と土田遺跡、さらに稲沢市が調査した土田関連遺跡について比較・検討してみることにする。この三遺跡は時期的にも並行した部分があり、また、谷を挟んで隣接した微高地上に存在しており、比較・検討しやすいものと考えられる。(第15図)

廻間遺跡⁴⁾は土田遺跡と谷を挟んで北側に位置する。昭和60～61年に調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代前期および中世から近世の複合遺跡であることがわかった。弥生時代後期～古墳時代前期については、竪穴住居75軒、墳丘墓6基が検出され、その時期での中心的集落及び墓域を形成している。墓域は、前方後方形墳丘墓を中心として微高地の南側を選地して形成されている。集落は旧河道のすぐ南側に東西に並んだ形で配列されており、5～10軒を1単位として小集落を形成し変遷を辿っていく。そしてその集落に隣接した形で畑と考えられる畝状遺構も検出されており、近くで生産活動も行われていたと考えることができよう。墓域と集落は南北に隣接した形で存在しており、その墓域は集落に伴う墓と考えられることができる。また出土遺物は甕・高杯を中心に器種、器形も豊富で、これをもとに古墳時代前期の土器について8期に細分がされており、そういった点からもある程度の期間にわたって定住した様子が伺えよう。

一方、土田遺跡⁵⁾は、昭和56～60、平成元年に調査が行われた。時期としては、弥生時代後期から古墳時代前期および中世の複合遺跡である。弥生時代後期から古墳時代前期にかけては9基の墳丘墓、墳丘墓の周溝と考えられる遺構などが検出され、これらが墓域を形成している。しかし、集落またはそれに付随する遺構は未検出である。墓域は微高地上の北側を中心に展開しており、ちょうど廻間遺跡の墳丘墓と対峙した形である。もし、集落があるとすれば、微高地の南側に展開したものと推定できる。しかし、微高地の南側に当たる今回の調査区では、細長いトレンチ状の調査であったこと、遺構・遺物も少なく、性格を明確に決定づけられるだけのものは得られなかった。また、墓域としての機能が廻間遺跡に比べ短期間であること、また、規模も小さいことから、集落の存在を考えることができたとしても極めて短期間でまた小規模なものであったと考えられる。さらに、遺物も壺・高杯といった供献用と推定できるものがほとんどであり、生活の跡がほとんど見られない。また、遺物の時期も大部分が廻間Ⅰ式の範囲内というように、時期的にも極めて短期間の枠の中におさめることができよう。

土田関連遺跡(福田遺跡)⁶⁾は、昭和63年に稲沢市によって調査が行われた。それは今回の土田遺跡の調査と同様に南北に長いトレンチ状の調査であり、総延長は500mに及ぶ。その結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての東西にはゆる自然流路とそれを挟んで展開する集落を検出した。この部分については、自然流路を挟んで別の微高地上ということで、福田遺跡という別の遺跡として認定されている。この地点での集落の時期は古墳時代前期後葉と考えられ、やや時期を異にする。また、集落の在り方が自然流路に沿っており廻間遺跡と非常によく似ている。したがって、この遺跡が廻間遺跡消失後そこから移り住んだ人々によって営まれたと考えられよう。

このような点からみて、土田遺跡と廻間遺跡と福田遺跡については以下のようにとらえ得るのではないだろうか。すなわち、土田遺跡と廻間遺跡については中世ないし近世には別の遺跡としてとらえ得るのかもしれないが、弥生時代末から古墳時代前期にかけては同一の遺跡の中の一区域であるという認識の方が妥当ではないかと考える。これまでは二つの別の遺跡としてとらえられていたが、必ず



第15図 土田遺跡と福間遺跡（『福間遺跡』1990を一部改変）

しも一微高地＝一遺跡とする必要はないのではなからうか。すなわち、土田遺跡は廻間遺跡の一時的な、また一過的なもの、廻間遺跡の一時期に形成された単位の一つとしてとらえていきたい。一方、福田遺跡との関連については、時期がやや異なること、また、距離も若干離れていることから、関連はあるものの別の遺跡としてとらえていったほうがよいのではないだろうか。

こうした形の遺跡理解は各地で盛んに行われており、この地方でもすでに朝日遺跡、町田遺跡で行われている⁷⁾。このような理解は遺跡を大局的に見ていく上で重要な役割を果たすものと考えられる。とくに朝日遺跡の場合、弥生時代前期から古墳時代前期にかけて、規模、様相を変えながらも継続して営まれ、かつ、尾張低湿地部での中心的集落に想定できるという点、時期的に先行して始まり、時期幅も長く、遺跡の立地も類似している点など、大いに参考となる。

3. 周辺地域の様相

ついで、海部郡内に目を転じて遺跡の様相を見ていきたい。そこでは、土田遺跡・廻間遺跡より時期的には下がるが、美和町に所在する尾張低湿地で最古の前方後円墳と考えられている二ツ寺神明古墳(19)を中心として、その周辺には古墳時代前期に位置付けられ得る幾つかの遺跡が所在している。美和町内にある遺跡の中で古墳時代前期に比定できる可能性のある遺跡の数はかなり多い。しかし、その遺跡個々の様相については発掘調査を行ったわけではないので、はっきりしたことは分かっていないが、関連性をもった遺跡群であることが推定できよう⁸⁾。佐織町には、三角縁神獸鏡が発見された古墳時代前期に比定されている奥津古墳(45)があり、その北東には屋敷遺跡(44)が所在している。この二つの遺跡からは元屋敷式に比定できる土師器が出土しており、同時期に存在した集落と墓地という関係が成り立つと考えられる¹⁰⁾。近くには、諸桑遺跡(46)もあり、関連した遺跡群としてとらえられよう。また、海拔0メートル以下の地点ではあるが、津島市の寺野遺跡(37)では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が非常に多く出土しており¹¹⁾、その量の豊富さ、器種の多様さから、具体的内容については確認できなかったもの、おそらく近くに集落あるいは墓地があるものと類推できよう。

これらの遺跡はほぼ海拔0メートルのラインに沿った形で展開しており、それらが、すべて井関氏の言う沖積上部砂層上に展開するとすれば、その頃の海岸線の状況を考える上で貴重な資料を提供している。¹²⁾そして、土田遺跡や廻間遺跡も含め、その当時の海岸線に沿った形で微地形を利用して集落が点在しており、各々が独立した機能を持って展開していたのではなからうか。

4. まとめ

海部郡周辺地域での海拔0メートル付近での遺跡の在り方については一微高地を一単位として考えるのではなく、谷部分の土地利用の問題も含め、より大きな視野に立って考えていくことが大切である。この地域での遺跡の在り方についてはこれまでも言われてきたことではあるが、古代以前、すなわち、五条川などによる自然堤防形成¹³⁾以前は、縄文時代後期までには完了したと考えられる沖積上部砂層形成、そしてその後の埋積浅谷形成以降はほぼ一貫した形で進んでいったものと言えよう。また、この地域は、古代東海道などのルートにも近接しており、東西を結ぶ重要な地点としてももの動き、人の動きを考える必要が生じてくる¹⁴⁾。弥生時代中期以降、この沖積上部砂層、すなわち、微高地といわれる地域を中心にして尾張低湿地の開発、ことに、海岸ぞいの開発が進んでいったのである。今回調査した土田遺跡や廻間遺跡もこうした開発の波の中で成立し、機能していったのである。

(注)

- 1) 『愛知県遺跡分布地図(1)尾張地区』1986 愛知県教育委員会
- 2) 井関弘太郎 1982『朝日遺跡における旧自然環境の復元と考察』『朝日遺跡』愛知県教育委員会
- 3) 北村和宏 1988『阿弥陀寺遺跡周辺の弥生時代遺跡の立地について』『大河遺跡・阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 4) 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 5) 赤塚次郎他 1987『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 6) 北条献示、日野幸治 1989『土田関連遺跡発掘調査報告書』土田関連遺跡発掘調査団
- 7) 石黒立人 1987『朝日遺跡の変質と特質』『埋蔵文化財告知8』愛知県埋蔵文化財センター
朝日遺跡については1991年から順次報告書が刊行されていく予定で、そこで様相がさらに明らかになっていくものと考えられる。
神谷友和 1989『庄内川中流域右岸の弥生遺跡の実態』『町田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
この中で神谷氏は弥生時代の町田遺跡を勝川遺跡の一地区として認識している。
- 8) 注1に同じ
『美和町史』1982
- 9) 湯浅健二、江崎武、赤塚次郎 1990『蜂須賀遺跡と『海部の古道』』『考古学フォーラム 1』愛知考古学談話会
この中では、近接する幾つかの遺跡を組み合わせて一つの遺跡群としてとらえている。
- 10) 岩野見司他 1987『佐織町史 資料編2』
- 11) 『津島市史 資料編』1971
- 12) 森勇一他 1990『濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度および鉱物組成』『年報 平成元年度』愛知県埋蔵文化財センター
この中で森氏らは、土田遺跡の砂層が海浜形成物であると指摘している。
- 13) 注5に同じ
井関弘太郎 1981『尾張平野の先史遺跡と地形』『稲沢市史 研究編3 地理』
この中で井関氏は、稲沢市内の幾つかの地点のボーリング調査および発掘調査の結果を基に自然堤防の形成時期が10~13世紀であると推定している。
- 14) 注9に同じ

2 節 土田遺跡における中世土器の様相

1. はじめに

今回の調査で出土した中世土器¹⁾は全体でも3000点弱とそう多いものではない。それは、調査区の幅が4~5mと狭かったことにも依る。しかし、長さは既調査区を含めると約500mに達し、一つの集落をほぼ南北にトレンチをいれたかのような形となり、集落における土器のあり方を知る上では興味深い。また、遺構のなかからは良好な資料も見つかっており、中世集落における土器様相を検討する一つの好材料となるであろう。尾張地方における中世土器の研究は、この地方が瀬戸・美濃、渥美、常滑といった中世でも有数の窯跡群を近くに持つことから、生産地を中心として、早くから注目され、全国的にも研究の中心となっていた。その反面、消費地の状況は調査例もわずかで、その様相はつかめていなかった。

ところが、近年、土田遺跡を含めた周辺の尾張の低湿地部における中世集落遺跡の調査は幾つも行われ、様々な成果が挙げられている²⁾。土田遺跡では前回の報告(注2 赤塚他 1987、以下「土田 I」とする。)のなかで出土遺物の分類、変遷、技法等について様々な検討がなされている。本論はこれらの成果を参考にしながら、尾張の一中世集落「土田」における土器の実際について考えてゆこうとするものである。具体的なアプローチ方法としては土器の器種構成の検討が有効な方法であろう。「どの様な」土器を「どれくらい」使ったのかを検討することにより、食生活様式を含めた土器の使用形態を解明する大きな手がかりとなるであろう。また、これは瀬戸、常滑など巨大な生産地を背後に持つという特殊な消費地における土器のあり方を示すという意味でも興味深いことである。

以下、土田遺跡における器種構成について具体的にみてゆきたい。なお、遺物の数量計算に際しては、主として口縁部計測法に依ったが³⁾、補助的に総破片数も計測して示したものもある⁴⁾。

調査区	89A						89B						89C						合 計						
	破片数		口縁部		破片数		口縁部		破片数		口縁部		破片数		口縁部		破片数		口縁部						
器 種	個数	%	小計	個数	%	小計	個数	%	小計	個数	%	小計	個数	%	小計	個数	%	小計	個数	%	小計				
焼	山茶柄	356	63.0	5.82	54.4	1117	68.2	38.82	61.9	121	65.8	3.39	61.0	1594	66.8	88.00	61.1								
	種(灰釉)	19	3.4	385	0.40	3.7	6.46	15	0.9	1139	0.53	0.6	38.51	2	1.1	127	—	3.36	36	1.5	1651	0.93	0.8	49.32	
	”(灰釉)	4	0.7	69	0.68	0.7	60.4	4	0.2	69	0.08	0.1	62.6	2	1.1	69	0.08	1.4	64.9	10	0.4	69	0.24	0.2	62.5
	中国陶磁(白磁)	1	0.2	—	0.10	0.9	—	2	0.1	—	—	—	—	1	0.5	—	0.08	1.4	—	4	0.2	—	0.18	0.2	—
”(青釉)	5	0.9	—	0.06	0.6	1	0.1	—	0.08	0.1	1	0.5	—	—	—	—	—	—	7	0.3	—	0.14	0.1	—	
皿	土 師 器	10	1.8	—	0.88	0.7	23	1.4	2.64	2.8	2	1.1	—	—	—	35	1.5	—	—	—	—	2.72	2.4	—	
	山茶柄	54	9.6	70	2.96	27.7	390	11.6	216	29.49	31.9	32.29	16	8.7	18	1.33	23.9	1.33	260	11.0	304	33.77	30.3	36.36	
	種(灰釉)	2	0.4	12.4	0.16	1.5	30.7	2	0.1	13.2	—	—	34.0	—	—	9.8	—	23.9	4	0.2	12.9	0.16	0.1	33.2	
	”(灰釉)	2	0.4	—	0.88	0.7	—	1	0.1	—	0.17	0.2	—	—	—	—	—	—	3	0.1	—	0.25	0.2	—	
中国陶磁(青釉)	2	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	0.1	—	—	—	—	
鉢	山茶柄	25	4.4	38	0.11	1.0	40	4.2	2.6	56	1.34	1.4	1.62	2	1.1	13	—	0.42	69	2.9	107	1.45	1.3	2.47	
	種(灰釉)	6	1.1	6.7	0.16	1.5	4.0	6	0.4	3.4	0.28	0.3	1.7	6	3.3	7.1	0.31	6.1	7.6	18	0.8	4.5	0.78	0.7	2.2
	”(灰釉)	7	1.2	—	0.16	1.5	—	8	0.5	—	—	—	—	5	2.7	—	0.08	1.4	—	20	0.8	—	0.24	0.2	—
	中国陶磁(白磁)	1	0.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
変	種(灰釉)	1	0.2	53	0.10	0.9	13	3	0.2	115	—	—	0.42	—	—	20	—	0.26	4	0.2	188	0.19	0.1	0.91	
	”(灰釉)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	常 滑	52	9.2	—	9.4	—	2.1	1	0.1	7.0	—	—	0.4	—	—	10.9	—	4.7	1	0.1	8.0	—	—	0.8	
	中国陶磁(白磁)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
釜	土 師 器	10	1.8	—	0.13	1.2	113	4.5	73	1.5	0.43	0.5	0.43	5	2.7	5	—	—	0	88	3.7	88	0.56	0.5	0.56
	種(灰釉)	5	0.9	9	0.16	1.5	0.16	6	0.4	37	0.16	0.2	0.78	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	”(灰釉)	4	0.7	1.6	—	—	1.5	31	1.9	2.3	0.62	0.7	0.83	1	0.5	0.3	—	—	0	36	1.5	2.0	0.62	0.6	0.8
	中国陶磁(白磁)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
合 計	565	100	100	30.60	99.7	99.9	1636	100	95.65	100	2	100	184	100	100	5.56	99.1	100	2385	100	100	111.30	99.8	100	

第5表 調査区別中世土器出土量

2. 種類

出土した中世土器の種類は大きく分類すると土師器・山茶碗・施陶釉器・常滑（焼き締め陶器）・中国陶磁器に分けることができる。これらの遺物の調査区別、器種別の割合を示したのが第5表である。調査区ではB区から出土したものが圧倒的に多い。これはちょうどB区が集落の中心地に近いからであり、ほぼ同じ面積のC区が集落の南の境界に近い部分であるのと対照である。種類別で見ると、特徴的なのは山茶碗の比率が極めて高いことである。山茶碗は椀のみで全出土量の約60%を占め、皿・鉢などを加えると90%を越える圧倒的な量である。それ以外のものは土師器皿の約3%、以下すべて2%～1%未満という状況である。

次に、器種分類を含めて個々の種類別にみていくことにする。

a 土師器

土師器は量としてはあまり多いものではない。供膳具で皿、煮炊具で鍋・釜がある。尾張では土師器は古代より衰えみられるのみで、供膳具は基本的に存在しなかった²⁾。11世紀頃になってようやくロクロ成形の皿・杯が出現したが、量としてはわずかなものであった。12世紀になるとロクロ成形のものがあまりみられなくなり、代わって、非ロクロの皿が出現した。

分類 土師器皿は体系的な分類をするほど量が出土していないが、大まかにみると成形にロクロを使うもの（A類）、ロクロを使わないもの（B類）に分けられる。さらに法量と形態で細分したものを以下に示し、対照できるものについて「土田Ⅰ」分類を付す。鍋は口縁部を折り返す鍋（「伊勢型鍋」＝「土田Ⅰ」鍋A）がみられるのみである。釜は鈔のついた羽釜（「土田Ⅰ」釜A）がある。

皿（第17図）

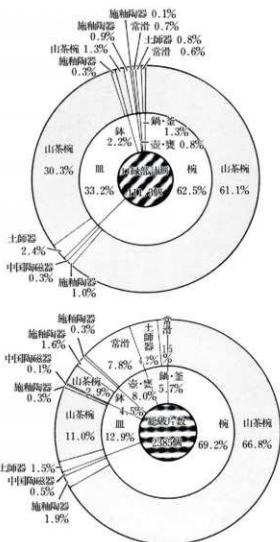
皿A ロクロ成形のもので、底部には回転糸切り痕を残すもの。

皿A1 底部が肥厚して突出するもので、口縁部が内湾するもの（「土田Ⅰ」＝D類）

皿A2 底部が肥厚して突出するもので、口縁部が外傾するもの（「土田Ⅰ」＝E類）

皿A3 底部が中空の大きな柱状高台をもつもの

皿B 非ロクロ成形のもので、口縁部をヨコナデするもの。



第16図 中世土器に見られる器種別割合

- 皿B 1 口径が9 cm以下の小型品で、口縁部が外反するもの(『土田 I』とC 3類)
- 皿B 2 口径が9 cm以下の小型品で、口縁部が内湾するもの(『土田 I』とC 1類)
- 皿B 3 口径が9 cm以下の小型品で、体部が扁平なもの(『土田 I』= C 2類)
- 皿B 4 口径が9 cm以下の小型品で、胎土が白っぽく、体部が深みをもつもの
- 皿B 5 口径が12cm以上の中型品で、口縁部が内湾するもの(『土田 I』= B類)
- 皿B 6 口径が15cm以上的大型品で、口縁部が内湾するもの(『土田 I』= A類)

b 山茶碗

山茶碗は古代猿投窯を中心とした灰釉陶器生産の系譜を引くもので、瓷器系陶器第II類に分類される⁶⁾無釉の陶器である。他に白瓷系陶器、灰釉系陶器とも呼ばれるものである⁷⁾。生産地としては、尾張・三河・美濃・伊勢・遠江の東海地域にのみ生産された陶器であり、全国的にみても、この地方の特徴的な遺物である。器種としては碗・皿・こね鉢等がある。

分類 山茶碗碗・皿・鉢の形態分類については『土田 I』により、詳細な分類が行われている。今回は『土田 I』と大きく変わるものではないが、若干名称を変更している。というのは遺物の量的な問題もあり、細かな分類は難しいので、碗・皿については基本的に胎土で大きくA・B(いわゆる南部系、荒肌手)とC・D(いわゆる北部系、均質手)の二つに分類し、さらに次の属性で細分した。それは法量、口縁部から体部の形態、高台を含む底部の特徴等である。鉢は『土田 I』では高台の有無でA・Bに分類されている。碗・皿については具体的に第18図に例を示めし、簡単に説明を付けておく。なお、対照の意味で『土田 I』における分類については括弧内に示した。

碗 (第18図)

碗A 胎土に砂粒を多く含むもので、径高指数が小さいもの。

碗A 1 体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部が丸く取められるもの(『土田 I』= A類)

碗A 2 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反するもの(『土田 I』= B類)

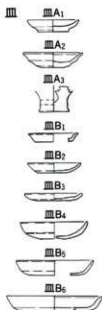
碗A 3 体部が直線的に立ち上がるもの(『土田 I』= C類)

碗B 胎土に砂粒を多く含むもので、径高指数の大きなもの。

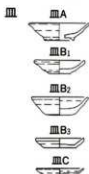
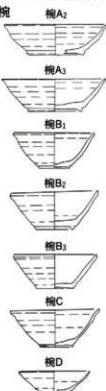
碗B 1 体部が内湾しながら立ち上がるもの(『土田 I』とD 1類)

碗B 2 体部が直線的に立ち上がるもの(『土田 I』とD 2類)

碗B 3 無高台のもの(『土田 I』D類に含まれる。)



第17図 土師器皿器種表(1/4)
碗



第18図 山茶碗碗・皿器種表(1/4)

椀C 胎土が均質、精良で径高指数の大きいもの（「土田Ⅰ」＝E類）

椀D 胎土が均質、精良で径高指数の小さいもの（「土田Ⅰ」＝F類）

皿（第18図）

皿A 高台をもつもの、いわゆる小椀（「土田Ⅰ」＝A類）

皿B 胎土に砂粒を多く含むもの

皿B1 底部が肥厚し、突出するもの（「土田Ⅰ」＝B1, B2類）

皿B2 底部が平坦で、体部が深いもの（「土田Ⅰ」＝B3類）

皿B3 底部が平坦で、体部が浅いもの（「土田Ⅰ」＝C類）

皿C 胎土が均質、精良なもの（「土田Ⅰ」＝D, E類）

c 施釉陶器

施釉陶器はすべて瓷器系陶器第Ⅰ類の瀬戸・美濃製品である。器種分類については数が多いのに量が少ないことなどから、かえって煩雑になるので分類せずに通常の名称を用いる。具体的には鉄釉天目茶碗・灰釉平椀・灰釉皿・灰釉鉢・灰釉柄付片口・灰釉四耳壺等がある。

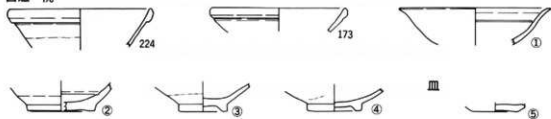
d 常滑

山茶碗を除く瓷器系陶器第Ⅲ類の焼き締め陶器としての常滑製品には壺・甕・羽釜がある。

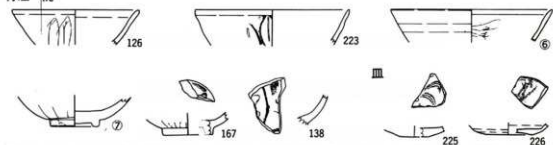
e 中国陶磁器

中国陶磁器はすべて青磁と白磁である。点数はあまり多いものではなく、器種も椀と皿に鉢が若干見られるのみである。白磁は玉縁状口縁の椀が中心で、ほとんどが太宰府編年の白磁Ⅳ類である⁵⁾。他には白磁Ⅱ類、Ⅴ-4類、口禿の白磁Ⅲ類等がみられる。皿はわずかに口禿の平底皿が出土しているだけである。青磁椀は龍泉窯系青磁椀で外面に蓮弁紋を有するⅠ-5類、Ⅱ類等が多く見られる。また、同安窯系Ⅱ類もみられる。青磁の皿も量的には少ないが龍泉窯系平底皿や同安窯系平底ⅢⅠ-1類などがみられる。

白磁 椀



青磁 椀



第19図 土田遺跡出土の中国陶磁器 (1/4)（「土田Ⅰ」③56BSK05、⑦56BSZ01、①②③56E検出、④⑥56A・B検出）
それ以外は本報告による

3. 時期設定

土田遺跡における時期区分についてはすでに『土田 I』でⅣ期区分がなされている。この時期区分は主として土師器の変化によるもので、鍋 A（伊勢型鍋）の変化に土師器皿の変化を加えて設定され、更に遺構出土の遺物（山茶碗）の変化も加味されている。今回の報告でも基本的にこの時期区分を踏襲するものとするが、設定基準となっている土師器鍋 A・皿の量がきわめて少ないため、遺構の重複関係に加えて、山茶碗の変化を中心として時期区分の設定をすることとする。結果としては『土田 I』の時期区分と内容的には大差はないものと思われる。各時期のメルクマールとしてⅠ期は山茶碗皿が皿 A（いわゆる小碗）のみで構成される時期である。Ⅱ期は皿 A の消失と皿 B 類の出現、Ⅲ期は碗 B 2・皿 B 3 類の出現、Ⅳ期は碗 D・皿 C 類の出現をもってする。

実年代については直接年代を当てはめられる資料はない。従って、ここではある程度、編年が確立している瀬戸などの山茶碗の生産地からの年代観を援用することとする。⁹⁾ 各生産地における年代観が必ずしも統一されたものではないため、実年代はおおよそのものとならざるを得ず、資料の増加を待ってさらに細かなものにしていかなければならないと思っている。Ⅰ期からⅡ期への変化は山茶碗皿における高台の消失をメルクマールとすることから、Ⅰ期を12世紀前半を中心として中葉頃までとし、Ⅱ期は12世紀中葉から13世紀前葉、Ⅲ期は碗 B 類の出現などから13世紀中葉から14世紀中葉、Ⅳ期は碗 D の出現などから14世紀後葉から15世紀にかけてとする。

4. 時期別器種構成

次に前項でみたⅠ～Ⅳ期における時期ごとの器種構成を見てみたい。数量化の基としたのは今回の調査で各時期の代表的な遺構から出土したものを口縁部計測法で計算して、合計したものである。ただし、今回の調査の遺物のみでは数量が少なく、普遍性をもたせにくいので、前回の調査で報告されたもののうち、各時期の代表的な

遺構出土遺物を『土田 I』に従って抽出し、同じ方法を用いて計測し、その数を加えている。その遺構というのはⅠ期 S E 05・S E 07・S K 05、Ⅱ期 S E 11・S E 16、Ⅲ期 S E 10・S K 67・S D 61・S D 65・Ⅳ期 S D 64 である。

Ⅰ期

この時期の遺構は少なく、わずかに S D 27 等がある程度である。

碗は 62.9% と約 2/3 を占める。このうち中国陶磁器が若干含まれる以外はすべて山茶碗で 61.0% である。この時期の山茶碗は碗では A 類が中心で、体部に丸みを

器種	時期		Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ			
	残存率	%	残存率	%	残存率	%	残存率	%	残存率	%		
碗	山茶碗	31.87	61.0	29.71	71.7	42.63	54.5	4.65	49.1	6.47		
	施 輪(灰胎)		12.34		39.84	0.08	0.1	42.79	0.83	8.8		
	# (灰胎)		62.9		71.9			54.7	0.83	8.8		
	中国陶磁(白磁)	0.37	1.9	0.13	0.2		+					
								0.08	0.1	0.16	1.7	
皿	土 器 師	0.63	3.2	0.15	0.3	1.41	1.8	0.08	0.8			
	山茶碗	6.04	31.1	6.67	12.92	23.3	13.07	30.37	38.8	31.94		
	施 輪(灰胎)		34.3		23.6	0.08	0.1	40.9	1.49	15.7		
	# (灰胎)					0.08	0.1	0.49	5.2	21.8		
								0.08	0.1	+		
鉢	山茶碗	0.25	1.3	0.25	0.78	1.4	0.78	0.61	0.8	0.61	0.08	0.8
	施 輪(灰胎)		1.3		1.4		+		0.8	0.78	8.2	
	# (灰胎)								+		9.1	
赤変	施 輪(灰胎)				0.66	0.17	0.2	1.71	+	+	+	
	# (灰胎)		+					2.2	+	+		
	常 滑				1.2			2.2	+	+		
				0.66	1.2	1.54	2.0		+	+		
茶	鍋 土 器 師	0.29	1.5	0.29	1.5	+	+	0.49	0.6	+	+	
	土 器 師				1.05	0.24	0.3	0.64	0.08	0.8	0.08	
	常 滑		+	1.05	1.9	1.9%	0.40	0.5	0.8%		0.8%	
合 計	19.45	100.0	100%	35.40	100.0	100%	78.18	100.1	100%	9.47	100.0	100%

第 6 表 時期別中世土器出土量

もつ椀A 2類が最も多い。量は「土田1」で明瞭な変化の傾向が捉えられている。それによると椀では口径は大きいものから縮小する方向へ、器高はⅢ期頃まで微増しⅣ期になると急激に縮小する傾向にある。皿では口径、器高とも縮小する傾向にある。この時期の椀は口径は17cm前後、器高は5cm前後と最も大きい時期である。生産地については胎土に砂粒分を多く含む常滑・猿投の製品が中心で、これに瀬戸、渥美の製品がわずかに加わる。中国陶磁器ではこの時期はほとんどが玉縁口縁の白磁椀Ⅱ、Ⅳ類である。全体に占める割合をみると1.9%と各時期を通じて最も多い数字である。

皿は山茶椀が31.0%、土師器が3.2%で合計34.2%を占める。山茶椀はほとんどが高台をもつ皿A類である。口径は9cm前後、器高は3cm前後のものが中心である。産地は椀と同じで常滑や猿投の製品が多い。土師器は量としては多いものではないが、この時期にはほとんどがロクロ土師器で皿A 1、A 2類が中心である。

鉢は全てが山茶椀で遺物全体の約1.3%をしめる。この時期の山茶椀鉢はすべて高台のつく鉢A類で体部に丸みもち、口縁部は軽く外反する。生産地としては常滑などが考えられる。

壺・甕類はすべて常滑製品である。口縁部はみられないが、胴部の破片は多く、破片数で計算すると全出土量の約3.8%を占めている。口縁部はそのまま引き上げるタイプのものであると思われる。

鍋は全てが鍋A（伊勢型鍋）である。出土量は全体の1.5%、破片数でみると全体の8.7%に達する。形態的には口縁部端部の折り返しが厚みをもつものである。

釜には常滑製の羽釜が見られるが、量的には極わずか、破片数で計算しても約0.8%である。

Ⅱ期

この時期の資料にはSE04・SE05の廃棄土層より出土した良好な資料がある。他にもSK37など完形品をいくつか含むまとまった資料が多い。

椀は全体の70%を越えている。これは1つにはSE04のように山茶椀椀を大量に一括投棄するもの等があり、その数字がある程度反映している可能性もある。しかし全体的な傾向は大きく変わるものではないと考えられる。山茶椀は全体の71.6%を占める。形態的には大きな変化はないが、体部が直線的な椀A 3が増加する。口径は約16cmと縮小する傾向にある。中国陶磁器はⅠ期と同様、白磁椀Ⅳ類等がみられる。

皿は山茶椀では高台をもつ皿A類が若干残るが、中心となるのは高台の代わりに底部が肥厚してやや突出する皿B 1類である。口径は少し縮小して約8cmとなるが、これ以降、口径はほぼ同じ大きさである。土師器はロクロ成形の皿A 1・A 2に加えて、皿B 1類など非ロクロの土師器が出現してくる。量としては全体の0.3%と極わずかである。

鉢は山茶椀の鉢Aが約1.4%とⅠ期と大きな変化はみられない。体部は丸みをもつものと直線的なものがみられる。口縁部は丸く取めるものである。

壺・甕類はすべて常滑のもので、口縁部に面を持つようなものが出現してくる。口縁部の割合では約1.3%であるが、破片数でみると全体の5.6%を占めている。

鍋はすべて鍋Aで、形態的には大きな変化はない。口縁部は出土していないが、破片数では約3.9%あり、定量的にみられるものと思われる。

釜は全てが常滑の羽釜である。常滑羽釜はほぼⅡ・Ⅲ期にのみ見られる器種である。特にこの時期

は約1.9%とかなりの割合で出土する。体部は茶褐色で硬質のものと赤褐色でやや軟質のものが見られる。

Ⅲ期

Ⅲ期の資料としてはSE01・SE03、SD06・SD09等からの出土資料があるが、SD09では山茶碗の大量投棄がみられ、最低限でみて碗では15個体以上、皿では12個体以上の数が想定される。このころからわずかではあるが施釉陶器がみられるようになってくる。

碗では全体の約54.7%と若干少なくなっている。山茶碗では碗A類に代わって、瀬戸地域産であると考えられる碗B類がほとんどを占めるようになる。なかでも中心となるのは碗B2である。これに加えて碗B2の高台が取れた形状の碗B3も若干見られる。また、いわゆる均質手と呼ばれる美濃産の胎土が精良な碗C類も見られるようになる。この時期の碗の法量は、口径約14cm、器高約5cmが中心で、やや器高の高い、深みのある形態となる。また、この時期になると少量ではあるが施釉陶器がみられるようになり、灰釉の碗が0.1%ある。中国陶磁器は約0.1%見られるが、この時期より白磁は玉緑碗が減少し、わずかに口壳の碗がみられるのみである。代わって龍泉窯・同安窯系の青磁碗類が中心となってくる。器種としては、龍泉窯系の蓮弁紋をもつ碗Ⅰ-Ⅴ類やⅡ類がほとんどで、若干、同安窯系のもがみられる程度である。

皿は全体の約40%と量的に多い。山茶碗では皿B1・2類がみられなくなり、皿B3類が中心となる。皿B3類は口縁部の形態などに若干のバラエティーをもつが、底部は平底で口径が約8cmの規格化されたものである。皿B3類も碗と同様、胎土などから瀬戸産と考えられるものがほとんどである。皿についても、この時期からわずか0.1%ずつであるが灰釉、鉄釉の皿がみられるようになる。中国陶磁器では白磁の口壳の皿が少し見られる。土師器においてはロクロ成形の土師器皿A1・A2が見られなくなり、代わって非ロクロ土師器であるB類がほとんどを占める。ところが、このような動きとは逆に大きな中空の柱状高台をもつ皿A3が登場してくる。皿A3は底部に回転糸切り痕をもつものであり、明らかにロクロで作られたものであるが、他のロクロ土師器がみられなくなってから登場することになる。類例があまり多くないので不明であるが、Ⅳ期にも残るようである。土師器皿Bは約1.8%とわずかの量しか見られないので評価は難しいが、平安京出土遺物と似たような特徴をもつものもある。

鉢は山茶碗の鉢が約0.8%と大きな変化は見られないが、この時期からやはり灰釉の鉢(いわゆる盤)が出現する。

壺・甕は常滑製品が約2.0%みられる。この時期になると口縁部の緑帯もかなり大きなものになる。また、灰釉壺も見られるようになる。形態は手付の水注になると思われる。

鍋は約0.6%と大きな変化は見られない。鍋Aについては「土田Ⅰ」で胎土分析の結果が公表されているが、この時期になると、Ⅰ期・Ⅱ期と比べて胎土が大きく変化していることがわかっている。

釜は全体で約0.8%であるが、この時期から常滑の羽釜に加えて、土師器の羽釜がみられるようになる。量的には常滑のものが多いが、土師器も0.3%を占めるようになる。

Ⅳ期

Ⅳ期になると遺構の数も減少し、わずかにSD13等のみとなり、遺物の量もかなり減少する。

碗は全体の68.3%を占めているが、そのうち山茶碗の占める割合が碗全体の約72%とⅢ期以前の状

況と変化し、碗のなかにおける比率が減少してきている。形態的にはB・C類がほとんど見られなくなり、代わって美濃産の口径、器高が小さく、碗と皿の中間のような形態の碗Dが中心となってくる。これとは逆に量的に増加したのは施釉陶器である。Ⅲ期には遺物全体のわずか0.1%であったものが、Ⅳ期には17.6%を占めるようになる。碗でみれば約1/4が施釉陶器になる。形態的には灰釉の平碗、鉄釉天目茶碗などが多い。中国陶磁器では白磁は見られず、青磁の碗が若干みられる。

皿は全体でも21.8%と減少する。なかでも山茶碗は15.7%とⅢ期の半数以下となってしまふ。形態的には胎土が精良な美濃産の皿C類のみになる。口径はⅢ期と同じであるが、器高は縮小し、1cm以下となってしまふ。これに代わって大きく増加したのは施釉陶器である。全体では5.2%、皿だけでみればやはり1/4を施釉陶器で占めるようになる。釉は灰釉を施したものが多く、

鉢は山茶碗の鉢が0.8%あるが、これに灰釉の鉢（いわゆる盤）や柄付片口等が加わり、それに鉄釉を施した摺り鉢も登場してくる。

壺・甕類は口縁部はみられないが、破片数では3.5%とはば定量的にみられる。このころから口縁部の形態は「N」字状口縁になるものと思われる。

鍋はほとんど見られなくなってしまふ。

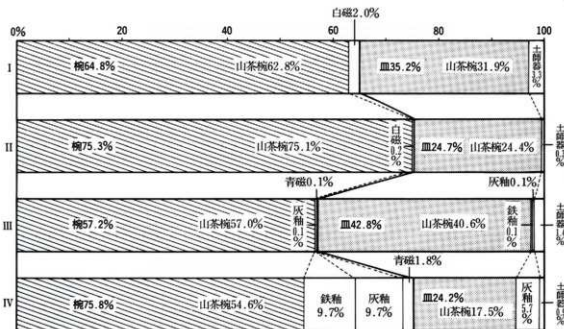
釜は常滑の羽釜がなくなり、土師器の羽釜のみになる。全体では0.8%、破片では約4.5%を占める。土師器の羽釜は胎土が今までの鍋と違って比較的砂粒の少ない精良なもので、薄く作られている。

5. 用途別にみた器種構成の特徴

次に個々の用途別にその器種構成を検討し、尾張の中世集落の土器の特徴について考えてみたい。

a 供膳具

いままで見えてきたように土田遺跡における供膳形態はそのほとんどを山茶碗が占める。他の地域が土師器や瓦器など“土器”を中心とするのに対し、東海地方では古代から陶器生産が発達し、生活容



第20図 供膳具に見られる時期別・種類別量比

器のほとんどを“陶器”で占めてきた。古墳時代から奈良時代にかけては須恵器が発達し、供膳具の全てを須恵器で占めた。平安時代になると国内で唯一の白瓷（灰釉陶器）を生み出し、全国各地に流通させた。尾張の一般集落から出土する供膳具もほとんどが灰釉陶器である。全国的にみても主要な供膳形態に土師器が登場しないのはこの地域のみである。11世紀末になると灰釉陶器生産は大量生産化と日常雑器化の結果、白瓷系陶器（山茶碗）生産に転換した。この地域の中世集落から出土する遺物のほとんどはこの山茶碗である。供膳具に土師器が登場するのは11世紀中葉頃で、東国でよくみられる柱状高台をもつクロ土師器皿が出現してくるが、これは主要な器種とはならず、特殊な用途に用いられたと推定される。

供膳具の各時期における碗と皿の比率は3:2から4:1ぐらいとなる。総破片数で比較すると差はさらに大きくなる。前回の報告ではほぼ1:1とされているが、全出土遺物の計測から平均するとおおよそ2:1という結果が得られた。この差をどのように解釈するのか難しいが、一つには土器廃棄の問題と関連する。各時期の主たる遺構は井戸・溝であり、これらの遺構から出土する遺物のなかには完形品を幾つも含む一括投棄と考えられる土器群を含む場合があり、資料数が少ない場合には口縁部計測法では数値にある程度の影響を受ける。遺構のなかには皿の方が多い場合もあり単純にはいえないが、第16図のグラフにみられるように包含層をも含めた数字からみて、おおよそ2:1という数が妥当であろう。

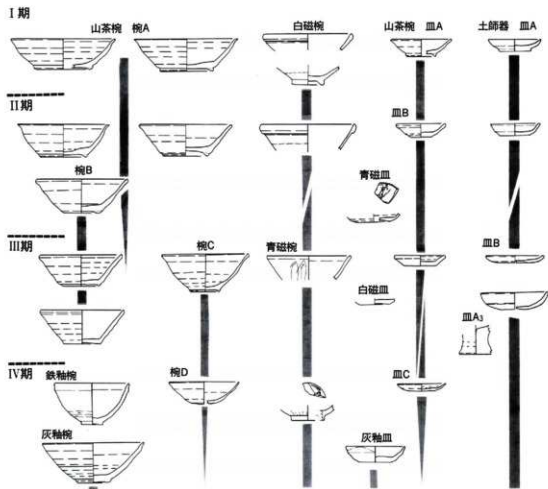
種類別でみると碗・皿とも山茶碗が各時期においてそのほとんどを占める。そこで少し山茶碗の変化をおってみると、I期の山茶碗は碗A2が最も多く、法量は口径が約17cm、底径が約8cm、器高が約5cmで全体的に大振り、体部が丸みをもつものである。皿はすべて高台のつく皿Aで口径は約9cm、器高約3cmである。胎土などから生産地として、常滑や猿投の製品が主であると考えられる。II期になると碗では碗A3が増加する。皿では高台が消滅して底部が突出した皿B1が主となる。産地としてはやはり常滑などが中心である。法量は碗の口径が約16cm、底径約7cmと口径、底径ともに縮小の傾向がみえる。皿でも口径が約8cm、器高が約2cmと縮小する。この傾向はIII期にもつながり、碗では口径がさらに縮小し13~14cm、底径約6cmとなる。皿については口径は変わらないが器高が低くなる傾向がある。碗の器種としては碗A類に代わって碗B類が中心となり、皿においても皿B1・B2に変わって皿B3が中心となる。碗・皿B3類の生産地としては瀬戸が考えられる。この時期には生産地の方で大きな動きがみられる。常滑においては壺・甕類の生産が主流となり、山茶碗の生産はほぼ停止してしまう。これに代わって瀬戸においては藤沢福年の甕型式¹⁰に窯の数が飛躍的に増加し、胎土に混和材を多く含むものになる。この生産地に於ける動向が土田遺跡にも影響を及ぼしているものと考えられる。IV期になると山茶碗の比率は碗のなかで70%強と減少する。胎土はほとんどが均質の美濃産のものとなり、瀬戸などの南部の生産地のものはあまり見あたらない。器種では碗が碗D類・皿C類が見られる。碗は口径・器高とも縮小するが、底径はさらに縮小し、碗と皿の間のような形態になっていく。皿は口径に変化はないが底径はさらに低くなり、1cm以下となる。

IV期に山茶碗の比率が減少するの代って、施釉陶器が増加する。施釉陶器はIII期にも若干見られるが、IV期になると供膳具の約1/4を占めるようになる。器種としては灰釉の平碗が最も多く、これについて鉄釉天目茶碗が多い。皿はほとんどが灰釉である。ちょうどIV期は施釉陶器生産の画期に

も当り、瀬戸ではいわゆる“古瀬戸”中期頃より器種の変化が激しくなり、それまで生産の中心であった四耳壺、瓶子などに加えて、灰釉平碗、鉄釉天目茶碗などの供膳具が量産されてくる¹¹⁾。それらが、山茶碗生産の衰退にともない、流入してきたものと思われる。

中国陶磁器はⅠ期に約2%の割合で白磁が見られる。白磁は碗がほとんどで中心となる器種は碗Ⅳ類である。Ⅱ期には若干数が減少し、青磁も同安窯系の皿などが、わずかに見られるようになる。Ⅲ期になると青磁と白磁の量が逆転し、白磁は口禿の碗Ⅸ類や口禿の皿が数点見られる以外はほとんど青磁で、龍泉窯、同安窯系の碗・皿が見られる。中心となるのは龍泉窯系の碗Ⅰ-5類である。Ⅳ期にも龍泉窯系の青磁が少し見られる。各時期とも量的には1~2%と少ないが、かなりの数の遺構に1~2点という状況で出土しており、特殊なものではあるが、ある程度は中国陶磁器が普及していたことが想定される。

一方、土師器については各時期に数%ずつみられるが、11世紀から12世紀はロクロ土師器がほとんどで、12世紀からは非ロクロ土師器となる。それぞれ、全体の2~3%弱を占めるが、この程度の割合では主要な供膳具とはなり得なかったものと思われる。土師器の出方は一ヶ所に大量に見つかることが多く、特殊な用途が推定される。土田遺跡においては土師器皿がまとまって出土した遺構はないが、周辺の遺跡を見てみると、阿弥陀寺遺跡、清洲城下町遺跡、森南遺跡などで土師器皿が大量に出



第21図 土田遺跡における供膳具の変遷(1/6)

土した遺構がみられる¹²⁾ 清洲城下町の場合は11世紀に遡る例であるが、P81から土師器皿A類がほとんど完形で21点出土している。これは祭祀のような特殊な遺構であると思われるが、森南遺跡の場合は集落に伴う溝から土師器がまとまって出土している。SD27、SD29は集落を通る主要な道路の両側の側溝であると考えられているが、報告ではそれぞれについて総破片数、1/12以上口縁部が残存するもの等の器種構成比が明らかにされている¹³⁾ それによると東側溝SD29に於ける土師器皿と山茶碗皿の1/12以上残存の場合の比率は2:7であるのに対し、西側溝SD27からは土師器皿がまとまって出土しており、同じ比率が4:1となっている。森南遺跡の場合も土師器が多く出土するのは限られた遺構のみであり、この地域における土師器使用形態の特殊性ということを知ることができる。土師器すなわち「かわらけ」の特殊な用途については古代の都城などの土器大量消費の傾向が拡大し、中世になって都市民に波及した結果おこるといふ見解がある¹⁴⁾ このような現象をそのまま当てはめるわけにはいかないが、尾張の集落にも何等かの形で波及したものと思われる。このことは12世紀代に京都系の土師器が出現することと無関係ではないのかも知れない¹⁵⁾ また土師器の生産地の問題については、まだ場所が特定された例はないが、胎土分析などの結果からはⅡ期とⅢ期の間に成分の大きな違いがあるという¹⁶⁾ Ⅰ期・Ⅱ期のものは不透明鉱物が多く産地が不明であるが、Ⅲ期のものについては「礫石」・「角閃石」を多く含み、濃尾平野で生産されたもの（在地生産）と推定されている。出土する量が少なく、特殊な用途が考えられるため、どのような生産形態を取るのか興味深い。かつて山茶碗の窯内から生産品として土師器皿がたくさん検出された例がいくつかある¹⁷⁾ これらの土師器はかなり特徴的で識別が可能であるが、土田遺跡を始め、管見では消費地における出土例については、類例を知らない。窯で焼成したものは極く一部で、特殊な例であると思われるが、一般的な土師器についてもある程度専門的な土器作りが存在していたことも想定される。

b 調理具・貯蔵具

土田遺跡における調理具としては山茶碗鉢のほか、施釉陶器鉢がある。貯蔵具では施釉陶器壺、常滑壺、常滑甕がある。

鉢はⅠ期からⅢ期まではすべて山茶碗の鉢である。形態としては斜めに開き、内面に柵目をもたない、いわゆるこね鉢である。出土する割合は、口縁部計測法では全体の1%前後、総破片数でみると2%前後と、定量的にみられるものである。形態は初期のものが体部に丸みをもち、口縁部を丸く収めるのに対し、時期が下がると口縁部の調整が難しくなり、面をもつようになり、Ⅳ期には高台が省略されるようになる。なお、今回の調査では常滑などでよくみられる小型の鉢類は全く見られなかった。

また、Ⅳ期になると施釉陶器の各種の鉢がみられるようになる。種類として灰釉鉢（折縁深皿）・卸皿・柄付片口・鉄釉摺鉢などがみられる。これらはⅣ期のみをとると8.2%とかなりの割合で出土する。これは、もちろん瀬戸における古瀬戸後期の碗や盤・鉢類生産の発展と製品の普及ということに起因するものであろう。そうすると、山茶碗鉢と施釉陶器鉢を加えた量はそれ以前のⅠ～Ⅲ期の調理具の量とあまりにも違うものとなる。この差をどのように解釈すればよいのであろうか。調理方法の復元は難しく、14世紀代に調理の方法が大きく変わったことを積極的に示すものはない。山茶碗碗でわずかではあるが卸目や片口をもつものがみられることがある。また、山茶碗碗のなかには内面が非常に摩滅しているものがしばしば見られる。これらのことを考えると山茶碗碗が単に供膳具のみではなく、

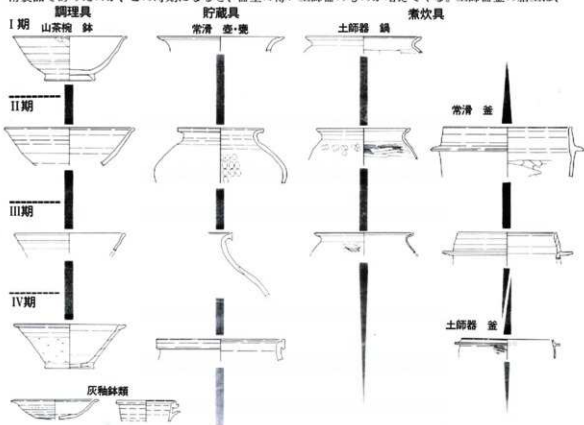
あるものは鉢のようなもの（調理具）としての用途をもっていたのかも知れない。

貯蔵具については灰釉四耳壺、灰釉水注、灰釉壺、鉄釉壺等の施釉陶器と常滑壺、常滑甕等の焼き締め陶器がある。施釉陶器がみられるのはⅢ期以降で量的にも極少量である。他方、常滑製品はほとんど大型のもので小型のものはみられない。量的には口縁部にすると少ないが、総破片数で計測すると各時期とも4～6%といった割合で定量的にみられる。

煮炊具

土田遺跡における煮炊具は土師器鍋・土師器羽釜・常滑羽釜が見られる。これらを合わせた数字は各時期とも1%前後と大きな変化はない。

古代における尾張の煮炊具は瓶・鍋が若干ある他はすべて甕であった。10世紀代までは長胴の甕が主流であったが、11世紀代になると三河が起源であると思われる甕H（“清野型”甕）が出現し、尾張ではこの甕が中心となる。¹⁸⁾ 甕Hは体部が浅く、甕というよりは鍋に近い形態のもので、このころ甕から鍋へという変化が起こっていたのであろう。ほぼ時を同じくして11世紀初めごろ現れたのが、伊勢が起源であると思われる甕I（鍋A＝“伊勢型”鍋）である。¹⁹⁾ 両者は12世紀はじめごろまで競合してみられるが、12世紀前半までに鍋Aが主流となり、唯一の煮炊具となる。Ⅰ期ではほとんどが鍋Aである。口縁部の数からすると1.5%、破片数では8.7%に達する。Ⅱ期になると常滑の羽釜が多数出現してくる。口縁部計測法では1.9%見られる。この時期から「鍋＋釜」という基本的なセットができあがる。Ⅲ期でもこのセット関係は変わらないが、釜の種類がⅡ期には全てが体部に厚みのある常滑製品であったのが、この時期になると、器壁の薄い土師器のものが増えてくる。土師器釜の胎土は、



第22図 土田遺跡における調理具・貯蔵具・煮炊具の変遷(1/10)

土師器鍋Aのものや違って、砂粒をあまり含まない精良なものである。常滑製のものや土師器のものは器壁の厚さに大きな違いがあり、熱の伝導などについても差があると思われる。Ⅳ期になると、常滑のものは極少量が残るだけでほとんどが土師器釜になってしまう。また、土師器鍋Aも減少し、ほとんど見られなくなってしまふ。「土田Ⅰ」では土師器鍋についても胎土分析が行われ、興味深い結果が出されている。それによると土師器鍋AはⅠ期とⅡ期においては不透明鉱物の多いものであったが、Ⅲ期になると黒雲母が圧倒的に多くなるという。Ⅳ期になると土師器羽釜と同様、重鉱物が極端に減少し、胎土の精良なものとなる。これは単に尾張だけの現象ではなく、三河の杉山遺跡でも見られるという²⁰。土師の胎土が共通していて、同じように変化することから、尾張・三河とも特定の産地から一貫して土師器鍋Aを入手していたものと考えられる。土師器の流通を考える上では興味深い結果といえるであろう。

6. まとめ

以上、土田遺跡における中世土器を器種構成を中心としてみてきた。この章は尾張の中世集落における土器の組合せを復元してみようというものであった。各時期ごとにその変化を見てきたが、基本的な器種構成には大きな変化はみられないといつてよいであろう。

食膳具では圧倒的に山茶碗が多く、各時期を通じて基本的な器種としての地位を占める。山茶碗が水分を含むと脆弱になるなどの観点から、この地域の中世の食膳具として木製品を主として考えようとする意見もある²¹。確かに、12世紀頃になると漆器でも「柿渋」を1回塗っただけの簡便な漆器の普及が認められており²²、ある程度木製品の普及はあったかも知れない。しかし、今回のように山茶碗の占める割合がかなり高いという状況から²³、木製品は漆器などの高級品としての使用・汁ものをいれる場合などの補完的な使用は考えられても、食膳具の中心であったとは考えにくい。やはり、日常用器としては山茶碗であり、やや高級品及び補完するものとして、木製品・中国陶磁器、特殊な用途として土師器皿という器種構成が中世（中世前期）を通じての基本であったと思われる。Ⅳ期になると施軸陶器が各器種とも増加し、比率が大きくなる。やがて、15世紀後半頃になると山茶碗はなくなり、瀬戸・美濃の施軸陶器、染付などの中国陶磁器や漆器が日常用器の中心におき代わっていく。

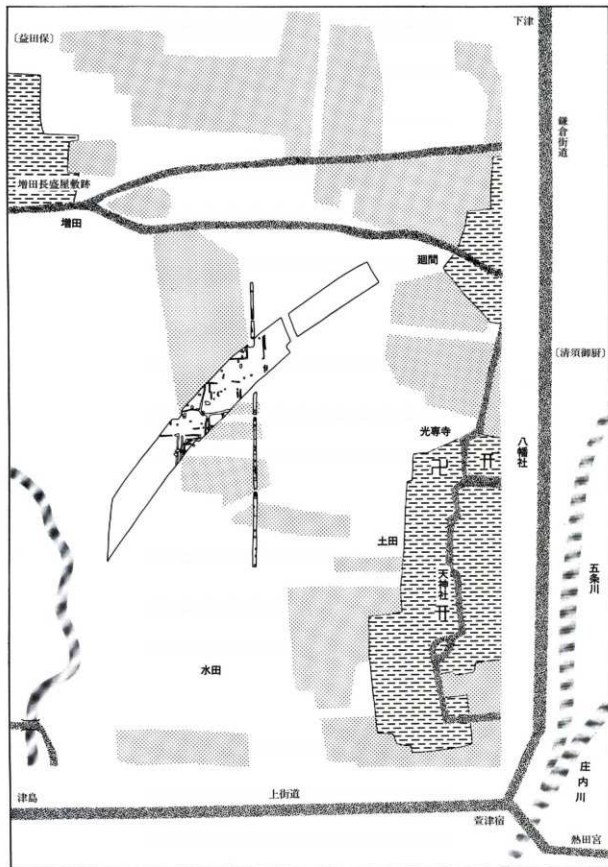
煮炊具では「鍋」＋「釜」が基本であった。「鍋」は古代末以来「伊勢型鍋」が全てを占める。Ⅳ期になると伊勢型鍋はほとんど見られなくなり、やがて内耳鍋が15世紀末頃に出現する²⁴。一方、「釜」はすべて羽釜である。12世紀から13世紀は常滑の羽釜が中心で、14世紀以降になると土師器が中心となる。

そのほか、鉢は山茶碗のこね鉢、壺・甕では常滑の大型の壺・甕、土師器の鍋・釜等きまったセットが各時期とも定量的にみられ、土器の上からは基本的な食生活様式の変化を示す要素は見いだせなかった。

以上、土田遺跡における土器の組成を概観したが、まだまだ、時期区分の点や細分化の問題など残された点も多い。また、今回は詳しく取り上げることができなかったが土器自体からみると、Ⅲ期、13世紀中葉頃に山茶碗の生産地の変化や土師器における胎土の変化など、土師の生産・流通上に大きな変化がみられた。そのほか検討すべきことは多々あるが、中世における尾張の集落の土師のあり方の一端を捉えることができたように思える。これを第一歩としてさらに資料を蓄積して、残された種々の問題を考えてみたい。

〔註〕

- 1) 中世土器という言葉は研究者により様々な意味で用いられているのが現状である。本報告で使用する土器・中世土器という言葉は土師器・陶磁器を含めた Ceramics (焼物全般) を指す用語として用いている。
- 2) 例えば、土田道跡では赤塚次郎他1987『土田道跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター、阿弥陀寺道跡(石黒立人他1990『阿弥陀寺道跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター)、森南道跡(加藤安信他1990『森南道跡』甚目寺町教育委員会)等が挙げられる。
- 3) 口縁部計測法については宇野隆夫1982『考察の方法』『丹波周山窯址』によった。
- 4) 総破片数の計算についてはきわめて細片で、判別不可能なものについては除外している。
- 5) 城ヶ谷和広1991『古代尾張の土師器』『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報』平成2年度
- 6) 中世陶器に分類については齋崎彰一1979『中世の社会と陶器生産』『世界陶磁全集』3による。
- 7) 「山茶椀」という呼称についてはいろいろと議論のあるところである(池本正明1990『猿投窯の「山茶椀」』『マージナル』10)。これは、山茶椀という言葉が狭義に椀のみを指す場合と広義の瓷器系陶器第II類全般を指す場合があるからである。本報告では後者の立場を取るが、山茶椀という呼称が適切な名称であるとは思わない。他に灰釉系陶器、白瓷系陶器という名称もあるが、まだ概念が充分整理・統一されていない面がある。従って、今回は暫定的に通用な名称である山茶椀を使用するが、適切な名称が確定すれば、変更すべきものであると考える。
- 8) 中国陶磁器の分類については横田賢次郎・森田勉1978『大宰府出土の輸入陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4などを参考にした。
- 9) 藤沢良祐1982『瀬戸古窯址群Ⅰ』『瀬戸歴史民俗資料館研究紀要』1など
- 10) 註9文献
- 11) 藤沢良祐1984『“古瀬戸”概説』『美濃陶磁歴史館報』Ⅲ
- 12) 阿弥陀寺道跡S D1015東西溝(註2石黒他1990)、清洲城下町遺跡P81(鈴木正貴他1990『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター) 森南道跡S D27(註2加藤他1990)
- 13) 註2加藤他1990
- 14) 藤原良章1988『中世の食器・考』『列島の文化史』5
- 15) 京都承土師器との対比についてはすでに佐藤公保が検討している。(佐藤公保1986『中世土師器研究ノート(1)』、『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和60年度)
- 16) 註2赤塚他1987
- 17) 例えば猿投窯K-87号窯(浅田貞由1986『山茶椀窯出土の土師器皿について』『愛知県陶磁資料館研究紀要』5)、美濃窯では尼ヶ根3号窯(山口正二他1987『尼ヶ根古窯跡群発掘調査報告書』)等の例がある。
- 18) 註5文献
- 19) 新田洋1985『平安時代から中世に於ける煮沸用具—伊勢型鍋—に関する若干の覚書—』『三重考古学研究』1
- 20) 北村和宏1990『「中世土器」の胎土分析』『阿弥陀寺道跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 21) 赤羽一郎1987『山茶椀に関する若干の考察』『マージナル』7
- 22) 四柳嘉章氏の一連の研究で明らかになってきている。(四柳嘉章1990『考古学における漆器研究について』『シンポジウム土器からみた中世社会の成立』など)
- 23) もちろん土器の種類により使用年数が違うということも考えなければならぬであろう。山茶椀は完形で捨てられることもよくあり、数字の上では大きいものとなるが、全体的な傾向としては大きく変わるものではないと思われる。
- 24) 佐藤公保1990『15世紀—17世紀の煮沸具』『マージナル』10



第23回 旧地形と推定街道 (明治24年2万分の1地形測量図「清洲」より作成、アミテンは島畑)

第Ⅵ章 結語

今回の調査区は幅約4～5mと狭く、遺構を復元的に捉えることは難しかった。しかし、すでに調査が終了した部分を含めると長さが約500mと長く、ほぼ南北に設定されているために、集落の南北方向の広がりを見る上では有効であった。

遺構の時期は中世が中心であるが、珪藻分析では該期及びそれ以前の土田遺跡周辺の地形復元で大きな成果を挙げた。この章ではこれまでの調査の成果を踏まえるとともに、自然科学的な所見を参考にしながら、土田遺跡の変遷を時代を追ってみてゆくことで結語としたい。

1. 中世以前の土田遺跡

古墳時代以前については遺物・遺構の面では検討できないが、珪藻分析により、かなり具体的に古環境の復元が行われている。詳細は第Ⅳ章に譲るが、簡単に見てみると、土田遺跡は縄文海進以降に何条も形成された「浜堤列」の一つであると思われる砂堆の上に立地する¹⁾。珪藻分析の結果から、この周辺は縄文晩期の頃(2530±190Y, B, P)、干潟もしくは河口域のような環境であったことが想定される。これは縄文海進以降の海面上昇(海進)によるものと考えられる。それ以降、徐々に陸地化してゆき、弥生時代頃には乾いた陸地と化し、自然流路が中央部を流れていた。土田遺跡はこの旧河道の埋没地形の上に立地していると考えられている²⁾。

古墳時代になると土田遺跡周辺は再び止水域となり、流れの少ない池沼となったようである。しかし、この時期に土田遺跡には初めて人間の行為による痕跡がみられるようになる。出現した遺構は墳丘墓であった。今回の調査では周溝と思われる溝SD101が一条見られるのみであるが、前回までの調査で墳丘墓が9基確認されている³⁾。5世紀頃は少し空白期間があるが古墳時代後期になると中心部分に再び古墳がみられるようになる。

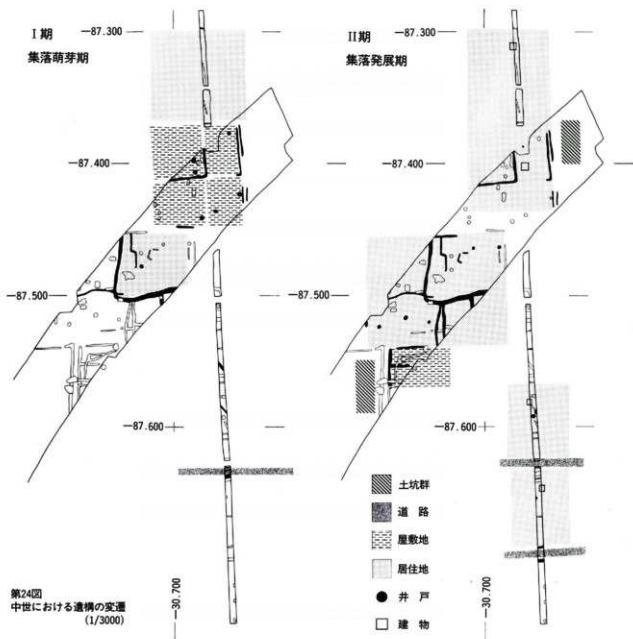
古代になってもこの周辺は依然として止水域であったようである。遺物ではB区の中央部などから飛鳥時代から奈良時代の土師器・須恵器が検出されているが、古代の遺構は全く見つからない。

2. 中世の土田遺跡

古代に空白期間をもつ土田遺跡は12世紀初め頃より、集落として機能し始める。珪藻分析によると土田遺跡の周辺では古墳時代以来の止水域から再び陸地と化し、南端部を除いてかなり乾燥した地表面が想定され、開発するのに適した状態となった。今回検出した遺構は屋敷地にもなるものと思われる井戸と溝、墳墓と考えられる方形土坑が中心である。各時期ごとにその様子を見てみる。

Ⅰ期 集落の萌芽期～12世紀前葉から中葉

Ⅰ期はまだ比較的遺構の少ない時期である。遺構は溝が中心であるが、SD12・SD20等は方位が他の遺構と全く違う。土田遺跡全体でみてもこの方位を取るものはない。この評価は難しいが、鳥畑状の微高地に沿って(第23図参照)現土田の集落の方へ伸びる道に沿ったものとも考えられる。中心部にはすでに整然とした30m～40mの大区画が成立するが⁴⁾ 周辺部の遺構は少なく、南北に伸びる鳥畑の中央部を中心として、集落の広がりはあまり大きなものではなかった。B区とC区の境界付近

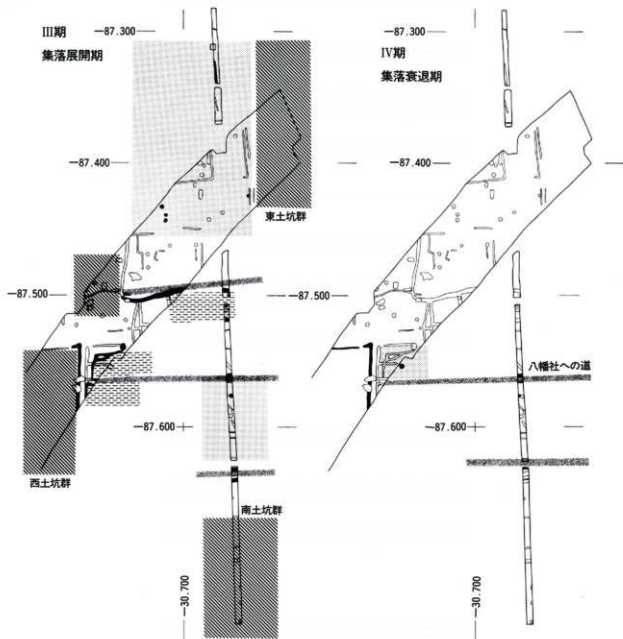


第24図
中世における遺構の変遷
(1/3000)

にはSD27が存在する。この位置は南北に伸びる島畑の南端部で、SD24～SD28の若干北にふった東西方向の溝が集中してみられる。これらの溝は各時期のものであるが、幅は2～3m、深さは1m未満と規模はほとんど同じであり、集落の南限を画するものとも考えられる。また、このような溝の集中は土田遺跡の南約1.2kmに立地する阿弥陀寺遺跡にも見られる³⁾。阿弥陀寺遺跡の場合は東西の坪界線であると想定されており⁴⁾、土田遺跡についても条里にともなう遺構とも考えられる。

II期 集落の発展期～12世紀後葉から13世紀前葉

II期になると調査区全体に遺構が広がり、各調査区に建物跡がみられる。大きさは2～3間のあまり規模の大きなものではなく、それぞれに井戸が伴う。井戸は曲物が基底部に据えられるものや素掘りのもので簡単な構造のものが多い。中心部分においても南の方に井戸がいくつか見られ、居住域が北から南へ移動していることがわかる。また、南の部分に溝で区画された屋敷地が出現する。それと同時に、I期にみられた南限を越えて、建物・井戸が出現し、集落の南の南東に伸びる島畑への拡張が想定できる。II期の南限は平行して走るSD31・32の2条の溝になり、C区南端の黒灰色腐



植質シルト層の堆積する湿地と思われる部分のぎりぎりまで集落は拡張しているものと思われる。

III期 集落の展開期～13世紀中葉から14世紀中葉

この時期になると、II期のような集落の広がりは見られなくなる。南の部分にはI期と同じ場所から南限と思われる溝がみられ、それより南には方形土坑群が広がっているのみである。B区では30mから40mの区画が出現する。B区北端には井戸枠をめぐらした井戸をもつ屋敷地がある。これは幅約3m、深さ約1mのしっかりとした溝SD09で区画されている。SD09には暗灰色の粘質の強いシルトが堆積し、滞水状況が窺われる。この時期は溝で区画された屋敷地群と方形土坑を主体とする土坑墓群がはっきり区分され、集落のなかでの場の区分というものが成立してくる。

IV期 集落の衰退期～14世紀後葉から15世紀

IV期になると遺構は極端に減少し、調査区中央部に少し遺構が存在するのみである。屋敷地・井戸等は見られなかったが、「土田I」に見られる“八幡社への道”沿いに遺構が少し存在する。

中世の開始時期については種々の説があるが¹⁾ いずれにしても土田遺跡は中世の幕開けとともに

集落として登場する。ちょうどこの時期は、気候も温暖で⁸⁾ 珪藻分析の結果から周辺の環境が、古墳時代以来の止水域から乾燥した陸地と化し、植物が繁茂する肥沃な土地へと移行した時期で、本格的な中世の開発行為が始まったものと考えられる。それともない島根の微高地上に沿って集落が形成され、人が住み始めるようになる。この時代を「大開発時代」と呼ぶ意見もある⁹⁾ 各地では大開発にしたがって、枝村や新村落が多数形成された。土田遺跡の出現は初めから大きな区画をもった整然とした屋敷地がみられ、自然発生的に集落ができたと言うよりは、計画的に開発にともなって形成されたと考える方が理解しやすい。また、B区とC区の境に各時期の溝の集中がみられるが、これを阿弥陀寺遺跡のように坪界線と考えることができるかも知れない。条里の存在、条里の時期等の問題については明言することはできないが、集落の出現が、ある程度、地割り等を持った計画的なものであったと考えられる¹⁰⁾ この周辺には伊勢神宮の「清須御厨」¹¹⁾ や国衙領「益田保」¹²⁾ がおかれたり、近くに大きな寺院である甚目寺などがあることなどから、寺社勢力との関わりも考えなければならないだろう。12世紀後半になると開発が軌道に乗ったのか、集落が南へ大きく拡張している。13世紀後半頃になると以前のような集落の拡張がみられなくなり、区画溝を持つ屋敷地が幾つも見られるようになる。また、中心部に屋敷地、周辺に墓域というふうに「場」の分離が始まる。ところが14世紀後半には遺構・遺物が減少してしまう。

3. 中世以降の土田遺跡

15世紀以降になると遺構は全くなく、遺物もほとんど見られなくなり、人々は別の場所へ移動してしまう。この様な現象は土田遺跡のみではなく、阿弥陀寺・森南遺跡など、この周辺に共通してみられる現象である。15世紀は気候の寒冷化による飢饉などきびしい自然現象が指摘されている。これらと対決するために人々は親村へ集住するなど、移動していったのであろう。その後は若干の遺物が出土するのみで、田畑、荒地と化していたものと思われる。

(註)

- 1) 森勇一1990「遺跡の立地及び地理学的環境」『阿弥陀寺遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 2) 石黒立人他1985「土田遺跡」『埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅲ (財)愛知県教育サービスセンター
- 3) 赤塚次郎他1987「土田遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 4) 註3文献
- 5) 石黒立人他1990「阿弥陀寺遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 6) 北村和宏1986「尾張の「条里制」小考」『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和60年度
- 7) 1990年の中世土器研究会シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」では中世の開始を大きくは11世紀中頃とする説と12世紀中頃とする説と2つの説が出された。
- 8) 山本武夫1976「気候の語る日本の歴史」
- 9) 稲垣泰彦1981「日本中世社会史論」など
- 10) 註6)文献では古代に施行された条里が実際には中世の開発時に地割りが成されたとしている。また、中世の条里の下に古代の地割りが認められないこともあるという(八賀晋1984「条里と技術」『講座・日本技術の社会史』6 土木)
- 11) 14世紀に成立したとされている「神萬鈔」は伊勢神宮の神領を記したものであるが尾張国条「新加敷在神領」に「清須御厨」とみえる。
- 12) 文和2年(1353年)醍醐寺文書に尾張国衙領としてみえる。
- 13) 戸田芳実・峰岸純夫1977「中世とはどういう時代か」『世界陶磁全集』3 日本中世

付 表

遺構一覽表

遺構番号	規模(m)		長軸方向	備 考	時期	登録番号
	長辺	短辺				
(SB)	SB01	—	5.5 (N-88°-E)	孤立柱建物	柱間1.8m 3間	API, AP4, AP13
	02	—	6.2 (N-80°-E)	#	柱間2.0m 3間	AP7, AP20, AP21
	03	—	4.9 (N-80°-E)	#	柱間1.8m 3間	AP14, AP18
	04	—	5.7 (N-86°-E)	#	柱間2.5~3m 2間	AP19, AP23, BP34, BP35
	05	—	4.8 (N-83°-E)	#	柱間2.4m 2間	BP36, BP39
	06	—	(3.0) (N-90°)	#	柱間1.5m 2間以上	CP7, CP20, CP21

遺構番号	規模(m)		方 向	備 考	時期	登録番号
	柱数	延長				
(SA)	SA01	(3)	—	N-63°-W	柱間1.6~1.8m	BP30, BP31, BP34

遺構番号	規模(m)		備 考	時期	登録番号	
	長径	短径				
(SE)	SE01	(4.0)	2.8	井戸枠+曲物1段	3	BSE01
	02	1.0	0.9	曲物1段	2	BSE02
	03	(3.0)	2.5	構造物不明	3	BSE03
	04	3.2	2.6	曲物2段、上面に廃棄土層	2	BSE04
	05	3.5	—	曲物1段、上面に廃棄土層	2	BSE05
	06	1.6	—	素掘り	2	CSE01

遺構番号	規模(m)		方 向	底部の傾斜	備 考	時期	登録番号	
	幅	長さ						
(SD)	SD01	0.6	0.2	N-75°-W	ほぼ水平	SK05に切られる	2	ASD07
	02	—	0.2	N-0°	#		3	ASD01
	03	0.8	0.2	N-12°-E	#		3	ASD08
	04	0.5	0.3	N-90°	#		3	ASD02
	05	—	0.1	N-0°	S→N		3	ASD03
	06	—	0.3	#	ほぼ水平	SD07を切る	3	ASD04
	07	1.0	0.2	N-90°	#	SD06に切られる	3	ASD05
	08	1.7	—	#	—		4	BSD05
	09	3.0	1.2	#	ほぼ水平	帯水状況	3	BSD06
	10	1.0	0.1	N-73°-E	#		4	BSD07
	11	0.4~1.1	0.1	N-79°-E	#		2	BSD08
	12	1.6	0.2	N-38°-W	#		1	BSD01
	13	2.3	0.5	N-90°	#	帯水状況	4	BSD02
	14	0.3	0.05	N-85°-E	#		4	BSD09
	15	0.8	0.1	N-84°-W	#		4	BSD03
	16	1.2	0.4	N-79°-W	#	帯水状況	4	BSD04
	17	0.3	0.6	N-83°-W	#		4	BSD10
	18	1.2	0.2	N-9°-W	#		1	BSD11
	19	0.3	—	N-50°-W	W→E		1	BSD12
	20	1.0	0.05	N-40°-W	ほぼ水平	SE05に切られる	1	BSD13
	21	1.2	—	N-25°-W	—		1	BSD14
	22	0.3	0.1	N-86°-E	ほぼ水平		1	BSD15
	23	0.5	0.1	N-90°	#		1	BSD16
	24	—	0.5	N-81°-E	E→W	古代?	1	BSD17
	25	—	—	N-79°-E	—		4	CSD01
	26	2.3	0.3	N-80°-E	ほぼ水平		3	CSD02
	27	2.5	0.3	N-77°-E	#	SD28に切られる	1	CSD03
	28	2.0	0.2	N-75°-E	#	SD27を切る	3	CSD04
	29	0.7	0.1	N-83°-E	#		1	CSD06
	30	0.7	0.1	N-90°	#	SX03を切る	1	CSD07
	31	1.3	0.3	N-75°-E	E→W		2	CSD08
	32	2.5	0.4	N-90°	W→E	SX07に切られる	2	CSD09
	101	(2.0)	(0.6)	—	—	古墳の周溝か		BSK18, BSK21

土坑

(SK)

遺構 番号	規模(m)			備考	時期	登録番号	遺構 番号	規模(m)			備考	時期	登録番号	
	長さ	短径	深さ					長さ	短径	深さ				
SK01	0.7	0.6	0.3			ASK01	SK27	—	—	0.3		4	BSK26	
02	0.6	0.6	0.2			ASK19		28	0.6	0.5	0.3		BSK14	
03	1.0	1.0	0.2			ASK18		29	1.0	0.9	0.5	2	BSK16	
04	1.1	0.8	—			ASK02		30	0.6	0.6	0.1	2	BSK17	
05	—	1.0	0.2	SD01, SK06を切る		ASK03		31	0.9	0.3	0.1		BSK20	
06	—	0.7	0.1	SK05に切られる		ASK04		32	—	—	—		BSK22	
07	0.8	0.8	0.1			ASK22		33	0.5	—	0.1		BSK24	
08	—	0.5	0.1	溝か		ASK20		34	1.1	0.8	0.1		BSK25	
09	—	1.5	0.1			ASK05		35	—	—	0.1		BSK28	
10	1.1	1.0	0.4			ASK06		36	—	—	0.5	3	BSK30	
11	1.0	1.0	0.1	SX01を切る	2	ASK18		37	—	—	0.5	SE04に切られる	2	BSK33
12	—	—	0.1		3	ASK08		38	1.1	0.5	0.3		3	BP45
13	—	—	0.2	SK14を切る		ASK15		39	—	—	0.1			BSK31
14	—	—	0.3	SK13に切られる	3	ASK13		40	1.0	—	0.4			BSK32
15	—	—	—		3	ASK14		41	—	0.8	0.2			CSK30
16	1.0	0.7	—		3	ASK10		42	0.8	—	0.2		3	CSK01
17	1.3	—	0.1			ASK11		43	1.2	1.1	0.3			CSK02
18	—	—	0.1			ASK12		44	0.8	0.7	0.1			CSK03
19	1.3	—	0.2			BSK05		45	2.0	1.3	0.4	2		CSK04
20	0.8	—	0.1		3	BSK03		46	0.9	0.5	0.1			CSK05
21	1.5	—	0.1		3	BSK06		47	1.5	1.3	0.2		4	CSK15
22	0.6	0.6	0.2			BSK07		48	1.0	0.9	0.1			CSK21
23	—	0.7	0.2			BSK08		49	—	—	0.1			CSK20
24	—	—	0.1			BSK09		50	1.9	1.8	0.2			CSK22
25	—	—	0.2			BSK11		51	1.0	1.0	0.2			CSK24
26	1.0	0.8	0.3			BSK13		52	1.7	1.5	0.2	2		CSK25

ピット

(P)

遺構 番号	規模(m)			備考	時期	登録番号	遺構 番号	規模(m)			備考	時期	登録番号	
	長さ	短径	深さ					長さ	短径	深さ				
P.01	0.4	0.3	0.2	SB01柱穴		AP1	P.28	0.5	0.5	0.2	SB04柱穴		BP10	
02	0.5	0.4	0.05	"		AP4		29	0.4	0.4	—	"		BP12
03	0.5	0.4	0.1			AP8		30	0.3	0.3	0.2	"		BP14
04	1.1	0.7	0.2			AP33, AP11		31	0.6	0.5	0.1	"		BP13
05	0.5	0.6	0.3	SB01柱穴		AP13		32	0.3	—	0.1			BP16(VID11h)
06	0.4	0.4	0.2			AP14		33	—	0.5	0.2			BP16(VID12h)
07	0.6	0.5	0.1			AP37		34	0.4	0.3	0.1			BP18
08	0.5	0.5	0.1			AP15		35	0.5	0.4	0.2			BP19
09	0.3	0.3	0.2	SB03柱穴		AP16		36	0.4	0.4	0.2			BP20
10	0.3	0.3	0.1	SB02柱穴		AP17		37	0.4	0.3	0.2			BP21
11	0.3	0.4	0.2	"		AP18		38	—	0.2	0.2			BP29
12	0.4	0.3	0.1			AP19		39	0.4	0.3	0.1			BP26
13	0.3	0.3	0.1			AP20		40	0.5	0.4	0.05	SA01柱穴		BP30
14	0.5	0.4	0.1	SB03柱穴		AP40		41	0.6	0.5	0.1	"		BP31
15	0.3	0.3	0.2	SB02柱穴		AP21		42	0.3	0.3	0.1	"		BP34
16	0.3	0.3	0.1			AP22		43	0.7	0.5	0.1	SB05柱穴		BP36
17	0.3	0.3	0.1	SB03柱穴		AP23		44	0.5	—	0.2	"		BP37
18	0.3	0.2	0.1			AP24		45	0.4	0.4	0.1			BP38
19	0.4	0.3	0.1			AP25		46	0.4	0.3	0.1	SB05柱穴		BP39
20	0.4	0.4	0.1			AP26		47	0.4	0.4	0.1			CP3
21	0.3	0.2	0.1			AP28		48	0.5	0.5	0.4			CP6
22	0.6	0.6	0.2			BP1		49	0.8	0.6	0.1	SB06柱穴		CP7
23	0.6	—	0.1			BP3		50	0.7	0.5	0.4	"		CP20
24	0.6	0.4	0.1			BP4		51	0.6	0.6	0.4	"		CP21
25	—	0.7	0.1			BP5		52	0.4	—	0.1			—
26	—	—	0.1	SB04柱穴		BP7		53	0.6	0.5	0.2			CP13
27	0.3	0.2	0.2	"		BP8								

方形土坑

(SX)

遺構 番号	規模(m)			備考	時期	登録番号	遺構 番号	規模(m)			備考	時期	登録番号	
	長さ	短径	深さ					長さ	短径	深さ				
SX01	—	—	0.5	SK11に切られる	2	ASK21	SX07	—	—	0.4	SD30を切る	3	CSK14	
02	4.0	—	0.4	N-0'	1	BSX01		08	—	1.5	0.4	SX09を切る		CSK16
03	—	—	0.2	SD30に切られる		CSK08		09	—	1.7	0.2	SX08に切られる		CSK17
04	—	—	0.1			CSK09		10	3.2	—	0.3	N-6'-W		CSK23
05	1.5	1.3	0.1	SX06に切られる		CSK10		11	3.1	—	0.2	N-7'-E		CSK27
06	2.9	—	0.3	SX05を切る	2	CSK11		12	2.8	2.2	0.4	N-5'-W	2	CSK28

遺物観察表

古墳時代の遺物

図版番号	遺構	器種	法量(cm)				軸葉・調整等		備考	登録番号
			器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
9-1	A検出	土師器 広口壺	—	(18.6)	—	—	—	ヨコハケ	口縁内面帯描文	A-301
2	SK36	＊ ＊	—	—	—	—	—	ナデ	—	B-304
3	SD101	＊ 壺形壺	—	(11.4)	—	(23.5)	—	ハケ 口縁部ハケ	—	B-301
4	SD101	＊ 長頸壺	15.0	(8.6)	14.5	3.4	—	ヘラミガキ ナデ	—	B-302
5	SK39	＊ 広口壺	—	(15.0)	—	—	—	ハケ	—	B-305
6	SD101	＊ 壺台	—	(13.2)	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ 脚部欠損	B-303
7	B東1	弥生土器 高杯	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ ＊	B-306

中世の遺物

図版番号	遺構	器種	法量(cm)				軸葉・調整等		備考	登録番号
			器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
4-8	SE01	山茶碗 椀B ₂	5.5	13.4	—	6.0	中心ユビナデ	回転糸切	墨書有	B-001
9	＊ ＊	＊ ＊	5.4	13.0	—	5.4	＊ ＊	＊ ＊	内外面ともにスス付着	B-002
10	＊ ＊	＊ ＊	5.6	14.0	—	5.6	＊ ＊	＊ ＊	—	B-003
11	＊ ＊	＊ ＊	5.9	13.4	—	4.2	＊ ＊	＊ ＊	完形	B-004
12	＊ ＊	椀B ₃	5.2	13.2	—	6.0	＊ ＊	＊ ＊	無高台、底部板目痕	B-005
13	＊ ＊	椀B ₂	5.1	13.4	—	6.6	＊ ＊	＊ ＊	内外面にスス付着	B-006
14	＊ ＊	＊ ＊	—	13.8	—	—	—	—	—	B-007
15	＊ ＊	＊ ＊	—	13.0	—	—	—	—	—	B-008
16	＊ ＊	椀B ₃	5.0	13.3	—	5.6	中心ユビナデ	回転糸切	無高台 完形	B-009
17	＊ ＊	椀C	—	14.8	—	—	—	—	内面に自然釉付着 均質手	B-010
18	＊ ＊	椀B ₂	—	—	—	6.4	—	回転糸切	内外面ともにスス付着	B-011
19	＊ ＊	皿B ₂	1.7	7.9	—	5.0	ユビナデ、オサエ	＊ ＊	一部自然釉付着、墨書有 完形	B-012
20	＊ ＊	＊ ＊	1.5	7.9	—	5.3	中心ユビナデ	＊ ＊	—	B-013
21	＊ ＊	＊ ＊	1.4	7.5	—	5.1	—	＊ ＊	内面に自然釉・ゆう着物付着	B-014
22	＊ ＊	＊ ＊	1.6	7.9	—	5.2	中心ユビナデ	＊ ＊	完形	B-015
23	＊ ＊	＊ ＊	1.3	7.7	—	6.0	＊ ＊	＊ ＊	＊ ＊	B-016
24	＊ ＊	＊ ＊	1.7	8.2	—	4.6	＊ ＊	＊ ＊	＊ ＊	B-017
25	＊ ＊	＊ ＊	1.6	8.0	—	4.7	＊ ＊	＊ ＊	＊ ＊	B-018
26	＊ ＊	土師器 皿B ₂	2.9	11.6	—	5.8	タテナデ	底面不調整	手づね	B-019
27	＊ ＊	皿B ₂	—	12.2	—	—	＊ ＊	＊ ＊	手づね、口縁部スス付着	B-020
28	＊ ＊	加工円盤	1.4	3.7	—	—	—	—	山茶碗底部、重さ11g	B-021
29	SE05	山茶碗 皿A	2.6	8.0	—	4.2	—	回転糸切	高古有	B-022
30	＊ ＊	皿B ₂	2.4	8.2	—	4.4	—	＊ ＊	完形	B-023
31	＊ ＊	加工円盤	1.5	3.5	—	—	—	—	山茶碗底部 重さ10g	B-024
32	SE04	山茶碗 椀B ₃	5.3	13.7	—	6.6	中心ユビナデ	回転糸切	内外面にスス付着、墨書「井」	B-025
33	＊ ＊	小椀	3.8	11.0	—	5.8	—	＊ ＊	自然釉付着、墨書「十」	B-026
34	＊ ＊	椀A ₃	5.1	14.7	—	7.0	—	＊ ＊	自然釉、口縁部外面スス付着	B-027
35	＊ ＊	＊ ＊	5.0	13.5	—	6.7	中心ユビナデ	＊ ＊	—	B-028
36	＊ ＊	＊ ＊	4.6	13.7	—	6.6	＊ ＊	＊ ＊	—	B-029
37	＊ ＊	＊ ＊	5.5	14.9	—	5.7	＊ ＊	＊ ＊	口縁部内外面にスス付着	B-030
38	＊ ＊	＊ ＊	5.1	14.7	—	7.4	—	—	黒灰多い	B-031
39	＊ ＊	＊ ＊	—	15.2	—	—	—	—	全面に濃緑の自然釉かかる	B-032
40	＊ ＊	＊ ＊	—	14.2	—	—	—	—	—	B-033
41	＊ ＊	椀B ₃	5.4	14.9	—	6.7	中心ユビナデ	回転糸切	全面にスス付着	B-034
42	＊ ＊	椀A ₃	—	17.4	—	—	—	—	体面に段をもつ	B-035
43	＊ ＊	椀B ₂	—	—	—	6.0	—	回転糸切	内面に濃緑色の自然釉かかる	B-036
44	＊ ＊	椀A ₃	—	—	—	9.0	中心ユビナデ	＊ ＊	内面にスス付着、底部板目痕	B-037
45	＊ ＊	皿A	—	—	—	4.4	—	回転ナデ	—	B-038
5-46	＊ ＊	＊ ＊	2.3	9.8	—	4.5	—	＊ ＊	内面に緑色の自然釉かかる、高古有	B-039
47	＊ ＊	＊ ＊	2.7	9.6	—	4.8	—	回転糸切	高古有	B-040
48	＊ ＊	＊ ＊	—	6.9	—	—	—	—	自然釉付着	B-041
49	＊ ＊	＊ ＊	—	—	—	3.6	—	回転糸切	—	B-042
50	＊ ＊	皿B ₂	1.5	7.7	—	4.5	ユビナデ、オサエ	＊ ＊	内面に自然釉かかる、墨書「式法師」	B-043
51	＊ ＊	皿B ₂	1.9	7.4	—	3.6	中心ユビナデ	＊ ＊	完形	B-044

図版番号	遺構	器 種	法 量(m)			軸差・調整等		備 考	登録番号	
			器高	口径	胴径	内 面	外 面			
5- 52	SE04	山茶椀	皿B ₂	1.8	8.2	4.2		回転糸切	内面に自然釉かかる	B-045
53	"	"	"	1.9	7.6	4.9	中心ユビナデ	"	全面にスス付着、完形	B-046
54	"	"	"	1.9	8.0	4.3	"	"	完形	B-047
55	"	"	"	2.1	8.1	5.2	ヨコナデ	"	体部半分スス付着 完形	B-048
56	"	"	皿B ₂	2.0	7.8	3.8	ユビナデ、オサエ	"		B-049
57	"	"	"	2.1	7.8	3.6	ヨコナデ	"		B-050
58	"	"	皿B ₂	1.7	7.5	4.7	"	"	完形	B-051
59	"	"	皿B ₂	2.0	7.6	4.1	中心ユビナデ	"		B-052
60	"	"	皿B ₂	1.9	6.4	2.6	"	"		B-053
61	"	"	皿B ₂	1.9	7.6	5.8	"	"	自然釉、口縁部スス付着、完形	B-054
62	"	"	皿B ₂	2.2	8.2	4.2	中心ユビナデ	"		B-055
63	"	"	"	1.9	7.3	4.1	ヨコナデ	"	完形	B-056
64	"	"	小皿B ₁	1.8	7.7	4.9	中心ユビナデ	"		B-057
65	"	"	"	1.8	7.7	4.6	"	"	全面にスス付着	B-058
66	"	"	鉢	—	27.0	—	—	—	輪積痕跡少し残る	B-059
67	"	"	"	—	25.2	—	—	—		B-060
68	"	"	"	—	28.8	—	—	—		B-061
69	"	"	"	—	34.0	—	—	—	体部下弓回転 軸にラケズリ	B-062
70	"	常滑	釜	—	32.4	37	—	—	口縁回転ナデ 口縁回転ナデ	B-063
71	"	"	"	—	34.5	41.2	—	—	胴部ヘラケズリ 胴部ヨコナデ	B-064
72	"	"	壺	—	22.8	35.4	—	—	ナデ、オサエ	B-065
73	"	"	"	—	—	16.1	—	—	底面に砂粒痕	B-066
74	"	土師器	皿B ₂	1.3	7.8	6.0	ヨコナデ	ヨコナデ	降灰、ゆう着物付着	B-067
75	"	"	鉢	—	—	—	"	"	スス付着、「伊勢型鍋」	B-068
76	"	"	甕	—	—	—	"	"		B-069
77	"	加工円盤		1.6	2.8				山茶椀底部、重さ9g	B-070
78	"	"		1.3	3.5				"、" 7g	B-071
79	"	"		1.3	3.3				"、" 11g	B-072
6- 80	SD09	山茶椀	椀B ₂	—	14.2	—	—	—	内面自然釉かかる	B-073
81	"	"	"	5.4	14.0	—	5.0	中心ユビナデ	回転糸切	B-074
82	"	"	"	5.5	13.8	—	5.6	"	自然釉付着 底部板目痕	B-075
83	"	"	"	5.8	13.4		5.6	中心ナデ	底部内面工具によるナデ	B-076
84	"	"	"	5.7	12.9		4.8	—	底部ナデ、互直 外面全体スス付着、底部板目痕	B-077
85	"	"	"	5.5	13.2		5.2	中心ユビナデ		B-078
86	"	"	"	5.8	13.1		5.4	—	回転糸切	B-079
87	"	"	椀B ₂	5.5	13.8		5.1	中心ユビナデ	内・外面スス付着	B-080
88	"	"	"	5.1	13.0		5.6	"	自然釉付着、底部板目痕、完形	B-081
89	"	"	"	5.5	13.3		5.0	ユビナデ、オサエ	黒書「イ」、完形	B-082
90	"	"	"	6.1	13.9		5.9	"	"「大」	B-083
91	"	"	"	6.3	13.6		4.5	"	内・底外面スス付着	B-084
92	"	"	"	—	12.8		—	—	自然釉かかる	B-085
93	"	"	"	5.6	15.2		6.4	—		B-086
94	"	"	"	—	13.1		—	—	自然釉かかる	B-087
95	"	"	"	—	—		4.8	中心ユビナデ	回転ナデ	B-088
96	"	"	椀B ₂	5.5	13.4		6.0	"	回転糸切	B-089
97	"	"	"	5.4	13.3		6.0	"	無高台、底部板目痕	B-090
98	"	"	椀C	6.1	13.7		4.5	ヨコナデ	"、内面モシ痕	B-091
99	"	"	"	6.0	14.3		5.3	中心ユビナデ	内面にモシ痕、均質手	B-092
100	"	"	"	6.1	14.2		5.0	"	内面にモシ痕、均質手、準完形	B-093
101	"	"	"	5.5	13.6		5.4	—	"、"	B-094
102	"	"	"	—	—		5.6	—	ゆう着物有、高台ハクリ	B-095
103	"	"	皿B ₂	1.9	8.3		5.4	ユビナデ、オサエ	黒書有、底部板目痕、準完形	B-096
104	"	"	"	1.7	8.0		3.2	"	"、自然釉少しかかる	B-097
105	"	"	"	1.9	8.0		5.2	中心ユビナデ	口縁内面スス付着	B-098
106	"	"	"	2.0	8.1		4.7	"		B-099
107	"	"	"	1.8	9.0		6.4	ユビナデ、オサエ	ゆう着物付着、底部板目痕	B-100
108	"	"	"	1.7	8.2		6.0	中心ユビナデ		B-101
109	"	"	"	1.7	8.8		5.6	"		B-102
110	"	"	"	1.6	8.4		5.2	"	回転糸切、ナデ	B-103
111	"	"	"	1.6	8.0		5.0	"	回転糸切	B-104

図版番号	遺構	器種	法 量 (cm)				軸差・調整等		備 考	登録番号
			器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面		
6-112	SD09	山茶柄 皿B ₁	2.0	8.6		5.0	中心ユビナテ	回転承切	口縁スス付着	B-105
113	"	"	1.7	8.0		5.4	—	"	"	B-106
114	"	"	1.8	8.2		4.9	タナナテ	"	底部板目肌、口縁部自然釉、完形	B-107
115	"	"	1.6	9.0		6.5	中心ユビナテ	"	"	B-108
116	"	"	1.6	8.2		5.3	"	"	"	B-109
117	"	"	1.8	8.0		5.2	"	"	完形	B-110
118	"	"	1.5	8.3		6.0	ココナテ	"	"	B-111
119	"	"	1.3	8.4		5.2	中心ユビナテ	"	"	B-112
120	"	"	1.4	9.2		6.0	—	"	内面自然釉、ゆり着物付着	B-113
121	"	"	1.1	7.6		5.6	—	"	底部板目肌、内面自然釉	B-114
122	"	"	1.7	8.0		5.0	中心ユビナテ	"	"	B-115
123	"	"	1.6	8.0		5.0	"	"	"	B-116
124	"	土師器 皿B ₁	2.7	10.6		4.2	タナナテ	底部不調整	手づくぬ	B-117
125	"	皿B ₁	1.2	9.0		—	—	圧痕	器面減磨しい	B-118
126	"	青磁 柄	—	13.4		—	淡青緑色、光沢	淡青緑色、光沢	片切刺連弁文、龍泉窯系	B-119
127	"	陶丸	2.1	—		—	—	—	重さ15g、穿孔有(3mm)貫通せず	B-120
7-128	SD06	山茶柄 柄C	6.1	14.8		7.4	—	回転承切	均質手	A-001
129	"	柄A ₁	—	17.0		—	—	—	自然釉かかる	A-002
130	"	"	—	—		6.6	回転ナテ	回転承切	"	A-003
131	"	皿B ₁	1.6	9.2		6.4	—	"	自然釉かかる	A-005
132	"	柄A ₁	—	—		7.2	—	—	均質手	A-004
133	"	皿B ₁	1.5	8.6		5.6	中心ユビナテ	"	自然釉付着	A-006
134	"	皿B ₁	2.0	9.0		5.3	"	"	"	A-007
135	"	皿B ₁	1.5	10.0		7.2	—	"	"	A-008
136	"	"	1.9	9.8		6.5	中心ユビナテ	"	"	A-009
137	"	青磁 柄	—	—		—	濃緑色	濃緑色	"	A-010
138	"	"	—	—		—	濃緑色、光沢	濃緑色、光沢	内面へう摺文、帯摺文あり	A-011
139	"	土師器 柄	—	12.6		—	—	—	「伊勢型鍋」	A-012
140	"	山茶柄 鉢	—	22.8		—	回転ナテ	回転ヘラナテ	"	A-013
141	"	雲滑 壺	—	28.2		—	"	回転ナテ	外面自然釉かかる	A-014
142	SD16	山茶柄 柄A ₁	5.0	15.8		7.0	—	回転承切 ナテ	"	B-121
143	"	柄B ₁	5.5	13.6		5.6	ユビナテ、オサス	—	スス付着	B-122
144	"	柄A ₁	—	15.8		—	—	—	高台ハクリ	B-123
145	"	柄D	3.5	11.2		4.0	—	回転承切	"	B-124
146	"	皿B ₁	2.0	7.4		3.4	ユビナテ	"	"	B-125
147	"	皿B ₁	2.2	8.6		5.4	"	"	"	B-126
148	"	皿B ₁	1.6	8.0		4.2	—	"	"	B-127
149	"	"	1.7	7.9		5.2	—	"	内面自然釉かかる	B-128
150	"	土師器 皿A ₁	—	—	4.0	5.4	—	"	上面スス付着	B-129
151	"	柄	—	23.8		—	—	—	「伊勢型鍋」	B-130
152	"	加工円盤	1.2	2.4		—	—	—	山茶碗底部、重さ9g	B-131
153	"	雲滑 壺	—	34.6		—	回転ナテ	回転ナテ	"	B-132
154	SD12	柄	—	—		5.0	長石釉	高台ナテ出し	"	B-133
155	"	施釉陶器 鉢	—	—	5.0	—	鉄釉	"	天目茶碗	B-134
156	"	灯明皿	—	8.0	10.2	—	"	鉄釉	"	B-135
157	"	山茶柄 鉢	—	22.6	—	—	回転ナテ	回転ナテ	自然釉付着、内面に沈線	B-136
158	SD15	施釉陶器 鉢	5.3	22.0	10.6	—	"	回転ヘラナテ	内外面 灰釉(淡緑色)	B-137
159	SD13	山茶柄 柄B ₁	—	—	—	5.4	中心ユビナテ	回転承切	"	B-138
160	"	皿C	1.2	7.7	—	4.5	"	"	"	B-139
161	"	柄B ₁	—	—	—	7.0	"	"	"	B-140
162	"	土師器 皿A ₁	—	—	—	4.4	回転ナテ	"	体部中空	B-141
163	"	施釉陶器 平鉢	6.3	6.6	—	5.2	"	回転ヘラナテ	灰釉(淡緑色)	B-142
164	"	山茶柄 鉢	—	27.4	—	—	回転ナテ	回転ナテ	自然釉付着	B-143
8-165	SD25	"	—	13.0	—	—	—	—	"	C-001
166	"	皿C	1.0	7.8	—	5.0	—	回転承切	均質手	C-002
167	"	青磁 柄	—	—	—	5.4	淡青緑色、光沢	淡青緑色、光沢	見込み片切形、外面連弁文、龍泉窯系	C-003
168	"	加工円盤	1.3	1.8	—	—	—	—	山茶碗底部、重さ9g	C-004
169	SD26	山茶柄 柄C	—	11.6	—	—	—	—	均質手	C-005
170	"	"	—	—	—	4.0	—	回転承切	重ね焼痕 有、均質手	C-006
171	"	壺	—	—	12.3	—	—	"	内面に自然釉付着	C-007

図版番号	遺構	器種	法量(cm)			輪蓋・調整等		備考	登録番号	
			器高	口径	胴径	内面	外面			
8-172	SD27	山茶桶	皿A	2.7	8.2	3.4	—	回転糸切	高台有	C-008
173	#	白磁	桶	—	14.0	—	—	—	玉縁口縁	C-009
174	SD31	山茶桶	皿B ₂	2.0	7.6	5.0	—	回転糸切	—	C-010
175	#	#	桶C	—	14.0	—	—	—	均質手	C-011
176	SD32	#	桶A ₂	—	—	8.4	—	回転ナデ	重丸境肌有	C-012
177	SK37	山茶桶	桶B ₂	5.2	15.0	6.2	—	—	—	B-144
178	#	#	#	5.2	15.0	6.5	—	回転糸切	自然釉付着	B-145
179	#	#	#	4.6	13.9	6.2	—	—	内面スミ付着、自然釉付着	B-146
180	#	#	#	5.3	15.0	5.8	ヨコナデ	回転ナデ	自然釉、口縁外面スミ付着	B-147
181	#	#	#	—	14.9	—	—	—	自然釉かかる	B-148
182	#	#	皿B ₂	1.8	7.8	5.1	エビナデ、オサエ	回転糸切	内面自然釉、底部板目直、完形	B-149
183	#	#	#	1.8	7.9	4.4	中心エビナデ	#	内面全体自然釉かかる、完形	B-150
184	#	#	#	1.7	8.0	5.3	—	—	内面自然釉・降灰付着、#	B-151
185	#	#	#	1.7	8.0	4.4	エビナデ、オサエ	#	完形	B-152
186	#	#	#	1.8	8.3	5.4	中心エビナデ	#	—	B-153
187	#	#	#	1.9	8.3	4.4	エビナデ、オサエ	#	自然釉付着、完形	B-154
188	#	常滑	釜	—	29.6	31.0	—	回転ナデ	回転ナデ	B-155
189	SK17	山茶桶	桶A	—	—	7.6	中心エビナデ	回転糸切	色調 淡赤～黄褐色	A-015
190	#	土師器	鉢	—	29.0	—	—	—	「伊勢型」	A-016
191	SK11	山茶桶	桶A ₂	—	—	6.6	中心エビナデ	回転糸切	内面自然釉付着	A-017
192	SK38	#	皿B ₂	1.5	7.9	5.2	#	#	#	B-156
193	SK12	土師器	釜	—	25.0	28.8	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコナデ	A-018
194	SE01	山茶桶	桶A	—	—	6.4	中心エビナデ	回転糸切	筆書有	B-157
195	SK20	#	皿A ₂	1.7	7.3	—	4.7	ヨコナデ	#	B-158
196	SK21	土師器	釜	—	19.0	19.9	—	ヨコナデ	ヨコナデ	B-159
197	SX12	山茶桶	桶B	—	—	5.0	回転ナデ	回転糸切	—	C-013
198	#	土師質	土鉢	3.5	1.1	—	—	—	重さ4g	C-014
199	SX06	山茶桶	桶B	—	14.0	—	—	—	内外面ともに筆付着	C-015
9-200	B東レ	#	桶A ₂	5.2	16.6	—	8.6	ヨコナデ	回転糸切	B-168
201	#	#	桶A ₂	4.9	16.7	—	8.1	#	#	B-169
202	#	#	#	5.5	16.8	—	7.8	#	#	B-170
203	#	#	#	5.2	15.4	—	7.8	#	#	B-171
204	#	#	桶B ₂	5.8	15.4	—	5.9	#	#	B-172
205	#	#	桶A ₂	5.6	15.4	—	7.2	ヨコナデ	#	B-173
206	#	#	桶B ₂	5.3	13.2	—	5.1	#	#	B-174
207	#	#	#	5.1	14.6	—	6.0	ナデ、オサエ	#	B-175
208	#	#	#	5.3	13.8	—	5.8	—	#	B-176
209	#	#	#	5.1	14.3	—	6.8	—	完形	B-177
210	#	#	#	5.2	13.8	—	6.1	—	#	B-178
211	#	#	#	5.4	13.6	—	5.8	中心エビナデ	#	B-179
212	#	#	桶B ₂	5.1	12.6	—	4.4	—	#	B-180
213	#	#	桶C	—	—	—	4.4	中心エビナデ	#	B-181
214	#	#	皿B ₂	1.7	8.1	—	5.4	#	#	B-182
215	#	#	皿B ₂	2.3	8.1	—	4.2	#	#	B-183
216	#	#	#	2.1	8.0	—	3.4	#	#	B-184
217	#	#	皿B ₂	1.7	8.5	—	4.5	#	#	B-185
218	#	#	#	1.2	8.0	—	5.1	#	#	B-186
219	#	#	#	1.1	8.1	—	5.8	#	#	B-187
220	#	施釉陶器	桶	—	12.0	—	—	鉄軸	鉄軸	B-188
221	#	#	#	—	—	—	4.4	炭軸	筒合ナズ形、手挽か	B-189
222	#	土師器	皿B ₂	1.6	8.6	—	4.5	ナデ	手づか	B-190
223	A検出	青磁	桶	—	16.6	—	—	暗黄緑色、光沢	外面、片切形透弁文	A-022
224	#	白磁	桶	—	15.2	—	—	灰白色、#	外面上宇～内面施釉	A-023
225	#	青磁	皿	—	—	—	—	淡青緑色、#	底部露胎	A-024
226	#	#	#	—	—	—	—	、#	見込み欄描文、同安室系	A-025
227	#	山茶桶	桶C	5.7	14.2	—	5.8	—	均質手	A-026
228	#	#	#	3.4	9.6	—	2.4	回転ナデ	回転糸切	A-027
229	B東レ	#	皿B ₂	4.6	7.5	—	1.5	中心エビナデ	#	B-191
230	B検出	#	#	2.0	8.0	—	6.0	#	#	B-193
231	A検出	#	#	2.0	8.8	—	4.8	#	#	A-028

図版番号	遺構	器 種	法 量 (cm)				・ 軸差・調整等		備 考	登録番号	
			器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
9-232	B検出	山茶碗	皿C	1.2	8.0		5.8	中心ユビナテ	回転糸切	均貫手	B-194
233	"	"	"	1.2	8.1		5.8	—	—	"	B-195
234	A検出	"	皿B ₂	2.9	9.1		4.4	—	—	内面全体自然釉かかる	A-029
235	"	"	皿B ₃	1.8	8.2		5.0	—	—	"	A-030
236	B検出	施釉陶器	碗	—	12.4		—	鉄軸	鉄軸	"	B-196
237	C検出	"	鉢	—	15.8	13.4	—	灰軸	淡緑色光沢有	把手付	C-016
238	A検出	"	鉢	—	18.8	—	—	"	"	"	A-031
239	C検出	"	鉢	—	20.2	—	—	"	"	"	C-017
240	"	"	"	—	24.8	—	—	"	"	"	C-018
241	"	"	壺	—	16.2	—	—	回転ナテ	回転ナテ	"	C-019
242	A検出	土師器	不明	—	27.0	—	—	—	—	回転ナテ?	A-032
243	"	常滑	甕	—	39.6	—	—	回転ナテ	回転ナテ	"	A-033
244	"	加工円盤		1.2	2.4					山茶碗鉢体部、重さ12g	A-034
245	B検出	"	"	—	1.4	2.0				山茶碗底部、重さ10g	B-197
246	"	"	"	—	1.4	3.0				鉄軸壺体部、重さ13g	B-198
247	C検出	"	"	—	1.7					重さ5g	C-020
17-248	SD06	青磁	碗	—	—	—	—	淡青緑色、光沢	淡青緑色、光沢	龍泉窯系、片切形透弁文	A-039
249	A検出	"	"	—	—	—	—	淡緑色、光沢	淡緑色、光沢	内・外面磨瑠文、同安窯系	A-040
250	SD13	白磁	"	—	—	—	—	淡灰白色、光沢	淡灰白色、光沢	"	B-199
251	SK36	"	"	—	—	—	—	"	"	"	B-200
252	SD16	山茶碗	皿C	—	—	—	—	—	回転糸切	墨書有	B-201
16-283	SE04	常滑	甕	—	—	—	—	—	—	"	B-202
17-284	B東トレ	施釉陶器	壺	—	—	—	—	灰軸		印花巴文、四耳壺か	B-203

その他の時代の遺物

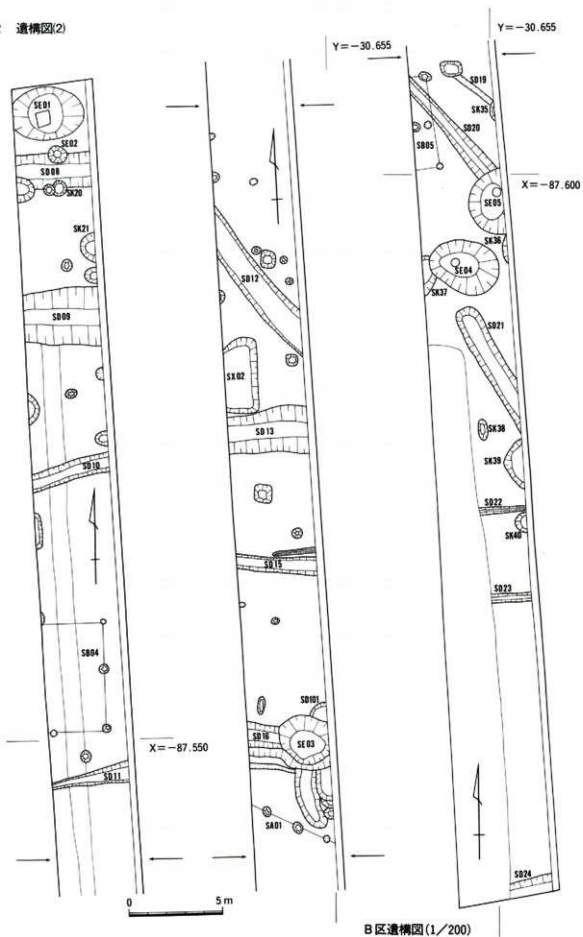
図版番号	遺構	器 種	法 量 (cm)				・ 軸差・調整等		備 考	登録番号	
			器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
11-254	SD06	須恵器	杯蓋	—	13.4			回転ナテ	片羽板ヘラケシ	"	A-019
255	"	"	杯身	—	12.6			"	—	自然釉かかる	A-020
256	"	"	"	—	14.2			"	—	"	A-021
257	SX02	"	杯蓋	—	18.0			回転ナテ		重ね焼き痕あり	B-160
258	"	"	"	—	17.0			回転ナテ	片羽板ヘラケシ	"	B-161
259	SD16	"	"	—	18.2			"	"	内面に自然釉付着	B-162
260	SX02	"	有台杯身	—	11.8					摩滅激しい	B-163
261	B東トレ	"	杯	4.1	11.8		4.0	回転ナテ	回転ヘラ切不整	内面全面にスミ付着	B-192
262	SD13	"	盤	—	23.2			回転ナテ		"	B-164
263	"	"	長頸瓶	—	—		8.6	"	"	"	B-165
264	"	"	"	—	—		4.6	"	"	中・下部・自然釉付着、体外面に沈積2本	B-166
265	SD16	土師器	甕	—	16.2			ココナテ	ココナテ	"	B-167
266	A検出	磁器	碗	—	13.0			—	—	染付	A-035
267	A検出	陶器	"	—	—	3.6		回転ナテ		鉄絵	A-036
268	C検出	磁器	碗	—	—	3.2		—	—	染付	C-021
269	A検出	陶器	"	—	—	5.8		長石軸	高台ケズリ出し	"	A-037
270	A検出	磁器	"	—	—	6.0		—	—	染付	A-038
271	C検出	陶器	壺	—	9.6			—	淡緑色、光沢有	長石軸	C-022

木 製 品

図版番号	遺構		(cm)			備 考	登録番号
			長さ	幅	厚さ		
10-272	SE01	草履状木製品	22.0	9.4	0.3	完形「板金剛」	W-01
273	"	"	22.0	9.5	0.2	"	W-02
274	"	曲物底板	13.0	13.7	0.8		W-03
275	SD16	"	13.3	9.2	0.7		W-04
276	SE01	箸	—	0.6	0.3		W-05
277	"	"	19.0	0.6	0.4	完形	W-06
278	"	"	—	0.6	0.3		W-07
279	"	"	—	0.7	0.4		W-08
280	SD39	加工部材	13.5	5.0	2.2		W-09
281	SE01	椀	6.0	1.9	1.5	完形	W-10
282	SK47		4.5	2.2	0.2		W-11

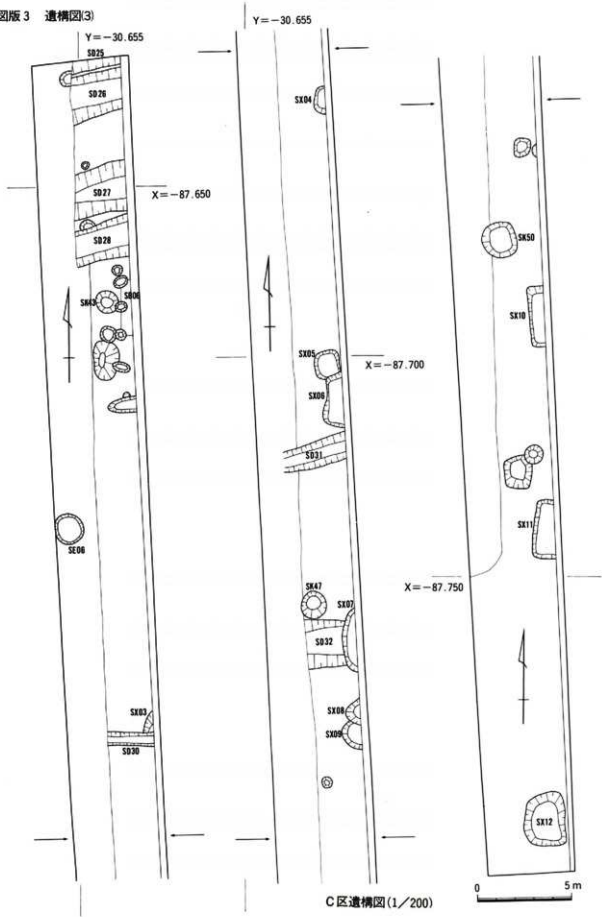
图 版

図版 2 遺構図(2)



B区遺構図(1/200)

図版 3 遺構図(3)

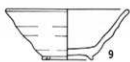


図版4 遺物実測図(1)

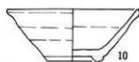
SE01



8



9



10



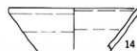
11



12



13



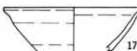
14



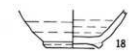
15



16



17



18



19



20



21



22



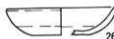
23



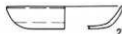
24



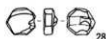
25



26



27



28

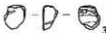
SE05



29



30



31



32



33



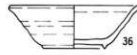
34



SE04



35



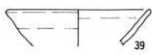
36



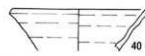
37



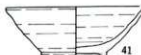
38



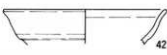
39



40



41



42



43



45



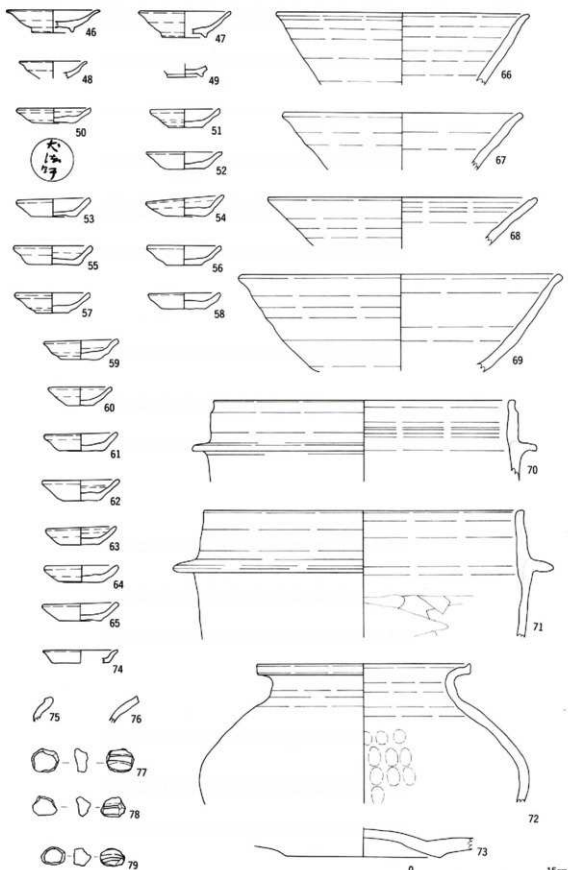
44



中世の遺物(1) SE01・SE05・SE04 (1/4)

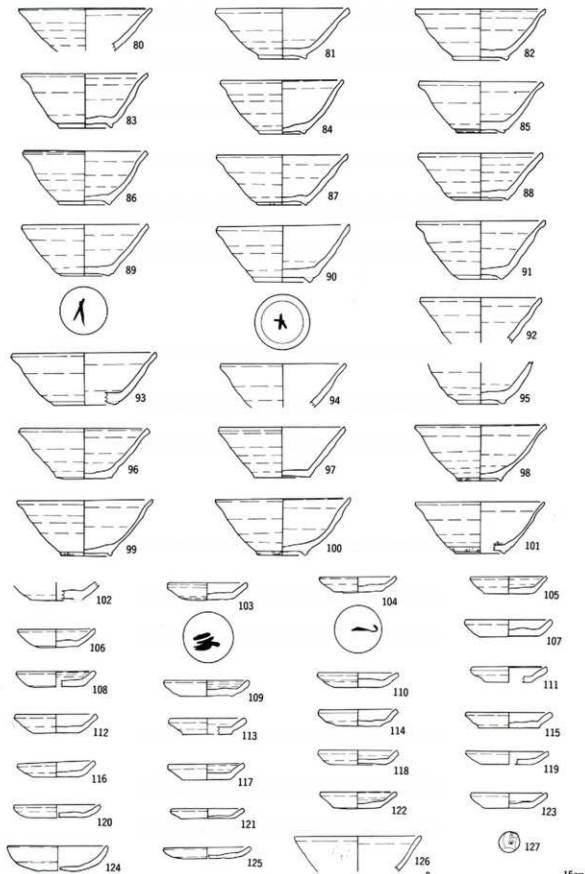
図版 5 遺物実測図(2)

SE04



図版 6 遺物実測図(3)

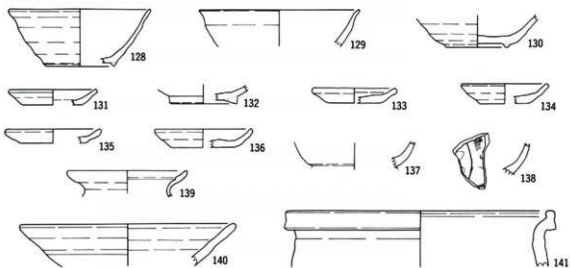
SD09



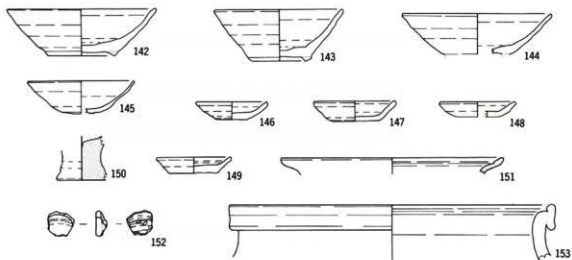
中世の遺物(3) SD09 (1/4)

図版 7 遺物実測図(4)

SD06



SD16



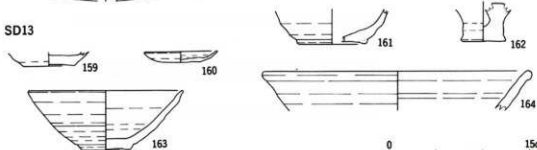
SD12



SD15

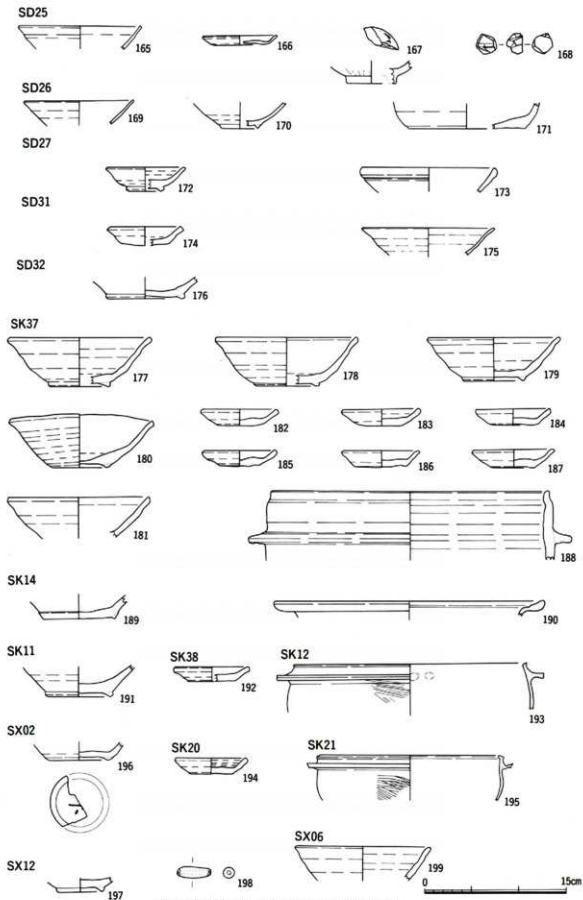


SD13



0 15cm

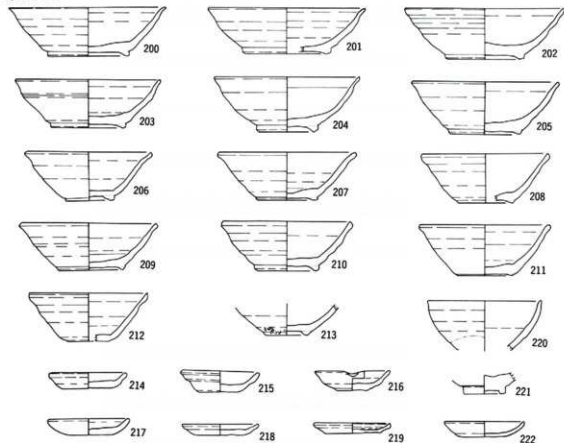
図版 8 遺物実測図(5)



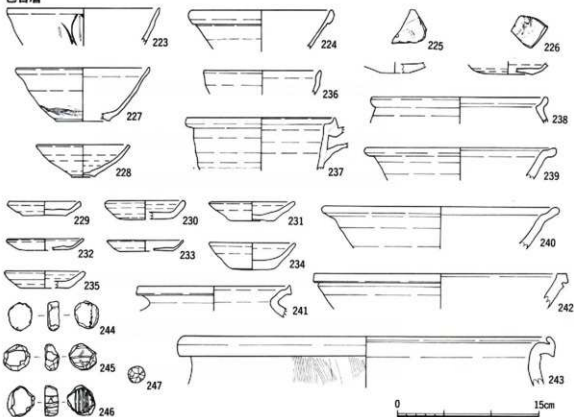
中世の遺物(5) SD27・SK37・SX12他 (1/4)

図版9 遺物実測図(6)

東トレンチ

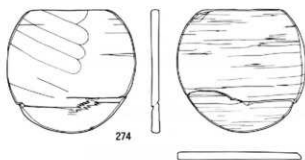
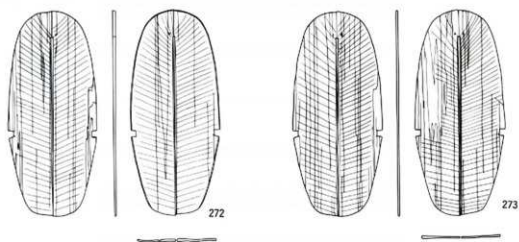


包含層

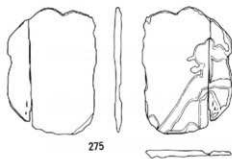


中世の遺物(6) 東トレンチ・包含層

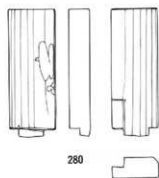
図版10 遺物実測図(7)



277



279

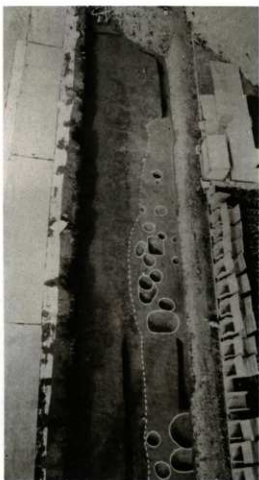


0 15cm

1. A区南部全景
北より



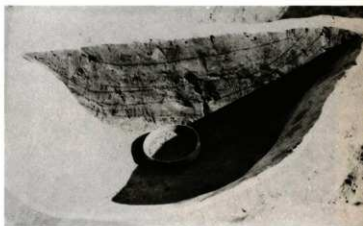
2. A区北部全景
南より



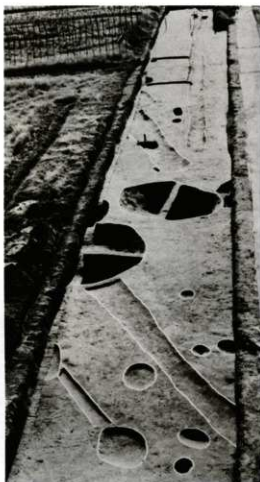
右列上から

3. SD101
土器出土状態
4. SD09
5. SD16、SE03

1. B区北部全景
北から

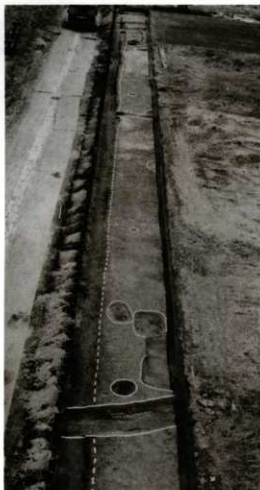


2. B区南部全景
北から



右列上から
3. SE04
4. SE04 曲物
5. SE05
6. SE06

1. C区北部全景
南より



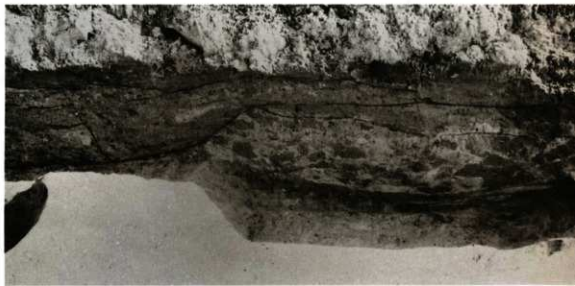
2. C区南部全景
南より



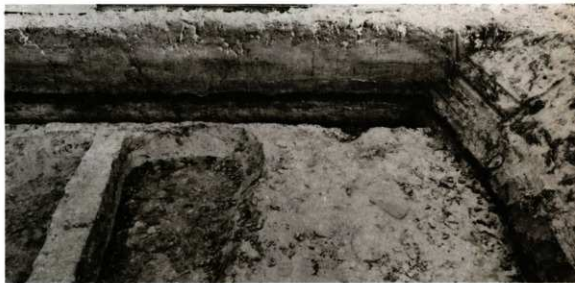
右列上から
3. SE01
4. SB06
5. SD27



1. SX01



2. C区南部
土層堆積状況



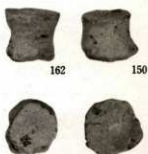
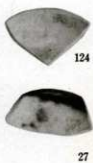
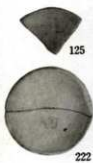
3. SE04・SE05
検出状況





3

4



26



47



29



30



21



22



24



25



51



53



55



63



122



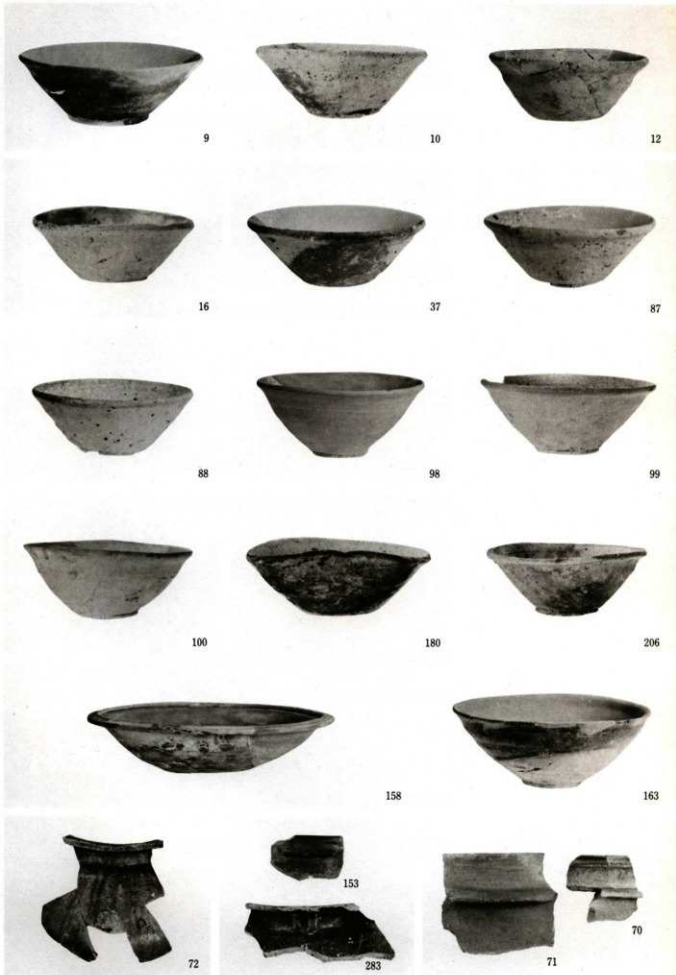
184

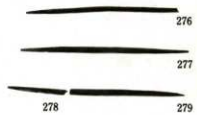
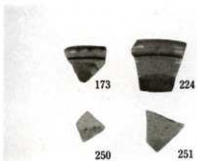
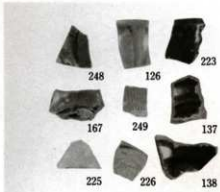


187



214







89



8



33



50



19



103



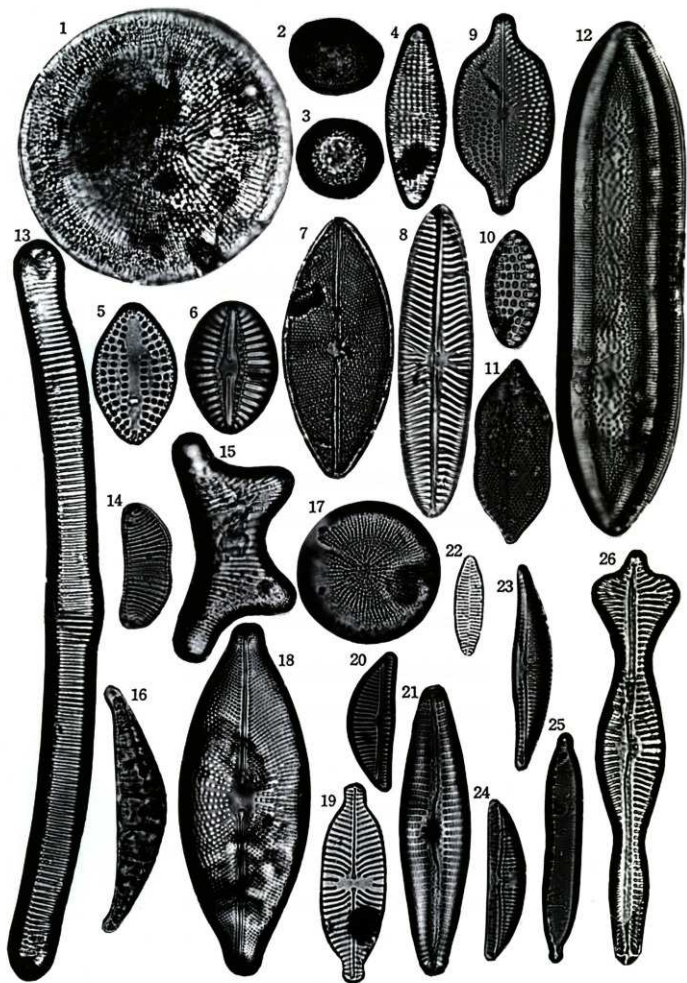
90



104



252



図版19 土田遺跡から産出した珪藻遺骸の顕微鏡写真

図版19

土田遺跡から産出した珪藻遺骸の顕微鏡写真

1. *Thalassiosira bramaputrae* (Ehr.) Hakanton & Locker
2. *Melosira* sp.-A
3. *Melosira* sp.-A
4. *Melosira* sp.-A
5. *Rhaphoneis surirella* (Ehr.) Grunow
6. *Diploneis smithii* (Breb.) Cleve
7. *Navicula marina* Ralfs
8. *Navicula digitoradiata* (Greg.) Ralfs
9. *Navicula alpha* Cleve
10. *Nitzschia granulata* Grunow
11. *Nitzschia panduriformis* var. *delicatula* Grunow
12. *Nitzschia marginulata* Grunow
13. *Eunotia pectinatis* var. *undulata* (Ralfs) Rabenhorst
14. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow
15. *Eunotia papilio* (Grun.) Hust
16. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Müller
17. *Melosira undulata* (Ehr.) Kützing
18. *Navicula pusilla* W. Smith
19. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs
20. *Cymbella minuta* Hilse ex Rabenhorst
21. *Cymbella leptoceros* (Ehr.) Kützing
22. *Fragilaria virescens* Ralfs
23. *Amphora ovalis* var. *lilyca* (Ehr.) Cleve
24. *Amphora ovalis* var. *lilyca* (Ehr.) Cleve
25. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow
26. *Gomphonema acuminatum* var. *coronata* (Ehr.) W. Smith
バースケールは10 μ m

1-12: 海水~汽水生種

13-26: 淡水生種

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集

土田遺跡 II

1991年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 日本印刷株式会社

(財) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書23集

『土田遺跡Ⅱ』 正誤表

巻頭の例言の頁

誤 7. 本書の編集及び執筆は・・・(中略)・・・、第三章1
節・第V章2節を加藤とよ江・・・・(以下略)

↓

正 7. 本書の編集及び執筆は・・・(中略)・・・、第三章1
節・第V章1節を加藤とよ江・・・・(以下略)